

特115

72

向上一路



始



43115
72



川合信水先生肖像

はしがき

古といはず今といはず、偉大なる事業は必ず敬虔なる信仰の基礎の上に建てられるものである。信仰の人の營む所はよしそれが世俗の眼には大きく見えないでも不滅の生命となり、無限の力となつて永遠に光を放つものである。

社運隆々今や世界に名聲を博し信用を博して居る郡是製絲會社を見て予はますます其感を深うするのである。惟ふに同社が過去に於て幾多の難を経た幾多の困難を凌いで今日を得たる所以は、實に社長故波多野鶴吉翁の活ける信仰の力が樞樞となつて居る事は決して予一人の私見ではないと信するのである。しかも翁の背後にあつて之が信仰を奨励し之が經營を指導したのは實に同社の教育部長川合信水先生其人である事を忘れてはならぬ。

先生は信仰の力を實業の線に織り込み「神の國は言に非ず能力にある」ことを如實に示しつゝ、上は社長兼役員より下は幾百千の職工工女を教育して居らるゝのであるが、その説かるゝところは高遠の學理でなく先生多年の體驗である。その温乎たる風貌と春の如き愛情には何人も知らず、啓蒙せられ感化せらるゝのである。昨春予が開業三十週年を記念し其恩寵を感謝するため先生を招じて講演會の開催を企てたところ、先生は特に予の微衷を諒とし病を冒して懸々來松せられ前後四回に亘り懇篤なる講演を辱うしたことは感謝に堪へない所である。

本書は實に其折の講演四篇と特に郡是製絲會社教育課長青木正親氏より寄せられた紹介文とを輯めたものである。希くば一人にても多く修養の歩を進め一人にても多く信仰の道に入らるゝことを切望する餘りに之を刊行して江湖に頒つことにしたのである。先生の熱誠なる信仰と偉大なる人格とは必ずや讀者諸君に向つて何物かと與へるであらうと確信するものである。

尙此の講演會を開くに當り特に主催の勞を執られた鳥根縣教育會に對し深甚の謝意を表する次第である。

大正十二年一月

四方文吉 識

大正 12. 2. 12 内交

目次

一、川合信水先生の片影	四方文吉
一、纏れたる偉人	青木正親
一、偉人の六大要素	川合先生
一、正大なる生活	川合先生
一、人格と事業	川合先生
一、婦人	川合先生
一、美	川合先生



向上の一路

川合信水先生の片影

四方文吉



川合信水先生は、往年長くも國母陛下行啓の光榮に浴した模範製糸場丹波綾部町郡是製糸會社の教育部長として同社の精神的經營に獻身尽力して居られる方である。

活ける信仰の人であり且つ實業界の典型であつた故波多野鶴吉翁が郡是製糸會社を設立せられる初に當つて、廣く我國に於ける會社工場を視察し、銳意研究の結果、其經營方式を分類してこれを偉大方式、偉小方式、凡大方式、凡小方式、折衷方式の五ツとなし、而して今後郡是製糸會社は偉大方式即ち偉人が主腦となつて、最も完全に且つ最も大規模なる設備の下に優良なる糸を多量に製造する方式によつて經營せなければならぬと決心せられた。而して此理想を實現するには先づ其會社の首腦たるもの、人格を向上することが最も大切であることは、恰も繭糸を改良するには先づ原蠶種を改良せねばならぬ

と同様であることを確信せられ、多年天下に物色して教を仰ぐべき良師を求め、漸くにして招聘せられたのが即ち川合信水先生其人である。聘に應じた先生は波多野翁に向ひ「工女を教育するには先づ社長及び幹部の人々が修養せねばならぬ」と言はれた、此一語は全く翁の素志と一致したので翁は大に感激し共鳴し、茲に知己遇合の奇縁は結ばれて肝膽相照す中にます／＼修養に努められたのである。

爾來翁は日夕先生に親炙して教を受けられたのであるが、翁が他に出で、講演せらるゝに當つては、先づ先生の指導を受けらるゝが常であつた。往年翁が當市に於ける協同傳導の講師として來松せられた折の親しきお話には、「余が今回協同傳導の應援に來るに際し、川合先生は余に向ひ、『波多野さんあなたは松江に行くに何を持って行く積りでありませうか、孔子の訓話や基督の教理を持つて行つたのでは、借り物で自分の物でないから人に與へることは出來ぬ、又人もこれを貰ふわけにはゆかぬ、眞に人を益し人に力を與へるには、自分の實驗し證得したものを持つて行く用意がなくてはなりません』と注意せられた」とのことであつた。翁の一言一行が人々に深刻なる印象を甚大なる感化を與へたのは、眞に偶然でないのである。

往年歐州戦亂の餘波我國に及び、糸價の大暴落となり、製糸家は大打撃を受け、各地の製絲會社は頻々として破産した。我出雲國の如きも從來の經營を續け得るものは殆どない位の悲境に陥つたが、郡是製糸會社も同じく大打撃を受け殆ど破産に類した。其折

の事である、社の緊縮をはかる第一着手として教育部を縮少したらばといふ考をほのめかす株主もあつたが、其時に翁は決然として「教育部は我社の基礎であり生命である、且つ太過なく社長として今日あるを得たのは全く先生の賜である、余は先生なくしては到底この大任を全うすることは出來ぬ、殊に今日の如き悲境の際こそ尙ほ一層信仰修養の必要が切なのである、若し教育部を縮少したり先生を斷るやうなことがあれば余は社長を辭するの外はない」といはれたので、つひに問題に上らなかつたといふことである。近時我國の會社工場の中に職工工女等の教育に心を用ひその設備をして居るものは無いではないが、社長重役の信仰修養を指導しそれらの人格の向上をはかる爲に師を聘したのは恐らくは郡是製糸會社の外にはあるまいと思ふ。

郡是製糸會社の社内には寮舎ありて三千の工女を盡く收容し、工女を指導する教師兼寮長養成の爲に師範科があり。又女工の技術を指導する教婦養成の爲に教婦養成科がある。この師範科の教師には特に中等學校教諭又は小學校教員中の信仰ある者を聘してある、師範科教婦養成科共に工女中より操行技術共に優秀なる者を撰抜して之に入らしめ、各六ヶ月間訓練したる上寮長又は教婦に任用する事になつて居る、尙ほ新入工女の技術并に品性を陶冶する爲に養成科を設け是亦六ヶ月間づゝ訓練し、又各分工場に於ても夫々教育施設を爲し先生自ら交互に巡回して指導して居られる。又年々工場長教育係等を本社に召集して講習會を開き、精神の修養人格の向上に努力せられてゐる、斯く秩

序整然一絲亂れざる教育の施設は全く川合先生の指導計畫によりてなるものである。會社創立以來僅々二十餘年にして二万五千圓の小規模より逐次發展して二千万圓の大會社となり、工女三千を有する本工場を始め東は山形縣より西は宮崎縣に至る八府縣に亘り二十有余の分工場を精神的に統一し、尙ほ年々二三の分工場を増加しつつあり、我出雲國に於ても既に昨年來二ヶ所までも着手せられ、隣縣鳥取市に於ても近く設置せられんとしてゐる、且つ將來支那に一大工場を設置し物質的にも精神的にも日支の提携を謀り東洋を一團として世界に雄飛せんとしてゐるが、此理想の實現せらるゝも遠からぬ事であらう。斯の如く會社が隆々として世界的に其名を輝かすに至つたのは、實に偉大なる信仰の人故波多野翁の遺徳と隠れたる教育家川合先生の指導によるといふも過言ではない。

余は郷里丹波を出で、當市に開業してより茲に三十週年さきに記念感謝會を開催せしが更に感謝の微意を表すべく記念講演會を企圖するに當り第一に先生に一場の講演をお願いした。從來先生は社外に出で、講演せられしことは殆どないけれども、今回余の微衷を諒とせられ特に快諾を與へられたので、不日先生を當市に迎へて親しく馨咳に接するを得ようとするのは眞に感謝の至である。此機會に於て當地方の人士が實業家といはず教育家といはず一人でも多く先生に親炙せられ向上の一路に向つて進まれんことを切望して筆を擱く次第である。(大正十一年四月松陽新報)

左の一編は川合先生の來松に際し、同社の教育課長青木正親氏より送られたものである、先生の面影を窺ふの好資料と思ひ、山陰新聞の餘白を借りて紹介したものに、再び同氏の訂正増補を願つたものである。

隠れたる偉人

青 木 正 親

川合信水師は郡是製絲株式會社の修道顧問、及び教育部長で、東京小石川、學生修道院の院長である。

近來會社がめき／＼と其の頭角を現はし、世界的摸範會社として世間の注目を引くに至つたのは、前社長波多野翁、並に現社長遠藤三郎兵衛氏、専務取締役片山金太郎氏をはじめ有力なる人々の爲であります、其の背後に隠れたる偉人川合信水師の教育指導と精神的經營の存するに外ならぬことを知らねばならぬ。

師は慶應三年十一月、富士山から二里ほど離れた甲州南都留郡の片田舎に生れた、二十二才の折、人生の大慘事が師の家庭に襲來した、そは一ヶ年の間に、四十才の慈母を喪ひ、二十五才の愛兄に訣れ、十七才の弟、七才の妹、一才の幼弟までも奪はれた事で

あつた。

六

僅々一ケ年の間に襲ひ來つた此等悲痛なる家庭の慘事は、師をして全く悲嘆と絶望とに陥らしめ、人生の無情に幾度か死をも求めしめた、乍併性來義に強く意志強固なる師はこれに由つて深刻なる宗教的慾求を引き起すに至つたのである。

これより後の師はあらゆる運命と戦ひ、苦痛辛酸の間に猛烈なる修行を積み、遂に大悟一番、神人合一の境界を體驗し、而も小成に安んぜず、順逆禍福の境を一貫して、信仰を養ひ修行を重ねること、前後三十餘年、今や洋々たる自由の境に逍遙するに至り驚くべき靈的經驗を爲すこと幾回であるかを知らない、師の生活亦實に千變万化である其の間難誌記者たり、神學生たり、傳道者たり、新聞主筆たり、學校長たり、工場教育者たり、あらゆる方面に於て、あらゆる經驗を嘗めたのである。

大なる宗教家である川合師は、一面又實に大なる教育者であり、事業家である、而も常に完全を理想として、決して現狀に停滯せず、熱烈なる其の向上心は更に新らしき向上を生み、向上又向上、如何なる境界まで進まるゝか、測り知ることが出来ない。

師の本師たる押川方義先生は、師の進境を推稱して止まず、「川合氏は日本に於ける第一流の大宗教育家にして、又大教育者である、其悟道は、能く基督の心に入り、其の教育法は、目標を示し、秩序を立て、循々として教へ導き、而も其の開發的なる所は、恰も孔子の教育法の如きものがある」と迄許すに至つた、川合師は一見温和平靜なる一凡

夫の如くであるが、而も一たび之れと面接するや、其の風貌自ら人を感化し、其言辭必ず人の魂を動かし、其の明は直覺的に人の心を觀破し、人の長短を見分ること明鏡の如く、子弟修行の程度段階を知り、其の變化の時機を觀るや、直ちに垂手助産の妙腕を揮ひ、人をして新生の境界に入らしむ、而して名を避け實を養ひ、黙々として愚を守り、着々として務め働いて居られる。

明治四十二年郡是製絲株式會社社長故波多野鶴吉翁、川合師を聘するに工女教育者たるを以てした、師は其の時直言して、「職工を善くしやうと思ふならば、先づ社長自ら善くならなければなりません」と曰つた、波多野氏は深く此の言に感動し、敬虔なる態度を以て、師の教を乞ふことになつたのである。

入社せる川合師は、教育部を創立し、會社全体の教育を開始したのである、以來十數年間の苦闘は遂に今日の模範會社を作り、今や社長重役の教育、各課長、各工場長、各教師、各主任の教育、職工の教育、一切の教育、日に／＼其の効績を擧げ、信仰即ち事業、事業即ち信仰、修養即ち事業、事業即ち修養の大理想を實現しつゝあるのである。

川合師の人格は、斯る一會社に用ゐるには餘りに勿体ない程である、故波多野鶴吉翁は「こよういふ田舎に來ていただくやうな人でないのが、來ていただく事になつたのは、私の生涯の幸福である、先生を得てから、私は人に勸めて、會社にはいるのが幸福であるといふことが出来る自信を得た」といはれた、また郡是製絲株式會社専務取締役片山

金太郎氏は「波多野翁の會社經營は、基督教の主義と事業家の主義と相半ばしたものでありましたが、川合先生が來られてから、凡てを其の悟得された神の大生命の中に包含し、統一して、教育、訓練を施し、而して基督の道をも徹底せしめ、事業をも徹底せしむる道を立て、ここに一新紀元を造られたことは、故波多野翁が終生の幸福と喜ばれたのみならず、吾々一同の深く喜んで感謝する所であります」といはれた、事實、師は現今十ヶ國に亘りて二十三ヶ處の工場を有する郡是製絲會社の全體を教育し、精神的に之れを統一して餘裕綽々として居られる、師が今後の進境と、師に對する神の今後の使命とは、唯神のみ知り給ふ處にして、私共の測り知る所でない。

イエス彼にいひけるは「我は道なり、眞理なり、生命なり、人若し我によりざれば父のもとに行くこと能はず。……我を見しものは父を見しなり、何ぞ父を我らに示せといふや……我汝等に語りし言は自ら語りしにあらず、我に居る父其行をなせるなり。……汝等すべて我が名によりて顯ふ所のことば我すべて之をなさん、父の榮の子によりて顯れんが爲なり。

(約翰傳十四〇六、九、十、十三)

一、偉人の六大要素

大正十一年四月十五日松江高等女
學校に於て中等學校男學生の爲に

川合先生

今回は偉人の六大要素といふことについて、お話いたして見たいと思ひます。近來人格といふことが社會の大問題となつて、人の深き注意を牽くやうになり、「彼の人は偉人である」とか「此の人は偉大な人である」とか申して居りますが、抑も偉人とは如何なる者であるか、之れを深く考へずして、偽善者や、山師や、如何はしい宗教家や、文學者を、偉人と感じたり、指導者と仰いだりして、終生教ふべからざる迷ひの路に飛びこむ者さへありますのは、誠に傷ましい事といはなければなりません。然らば眞の偉人とは如何なる者でありますか、人を見る上にも、己を修めて行く上にも、必ず之れをハツキリして置かなければなりません、偉人に無くてならぬ六大要素が六つあります、以下順を追つてお話いたしたいと思います。

第一 信仰

信仰については、今の日本國民は概して素養の足りない傾向がまゝります、これは遺憾

文部省が宗教々育を抜きにして國民教育を施しました結果でありまして、爲めに國民の道義は頽れ風俗は紊れて、眞に憂ふべき状態となつたのであります、こゝに至つて漸く信仰の大切なることに心づき、盛にお宮参りなどを奨励して、信仰心の養成に努めて居ることではありますが、こゝにいふ形式上の事のみでは何等力とならぬであります。

かゝる有様でありますから、各地に新しい宗教や、怪しげな教義が宣傳せらるゝと共に、之れに迷ふて色々困つた問題を惹き起すことがあるのも、當然の事と謂はなければなりません。

さらば私共の信すべき宗教は、如何なる者を選ぶべきか、又如何なる本尊を信すべきか、此の信仰を誤まつて善からぬ者を信じますれば、其の信することに依つて、人は却つて悪くなるものであります、昔猶太でモロクといふ偶像を信じた者は、銅で造つた其の神像の體內で、盛んに火を燃やし、其の眞赤となつた手の上に小兒を捧げて焼き殺さうして之れを祭つたものであります、また嘗て京都の市外に行はれた或る宗教では如何はしい神を立て、之れを信じて其の前に獻身の誓をすれば、如何なる事を爲しても罪にならぬといひ、男や女が集まつて破倫不徳の行をなし、其の勢力が漸次盛になりましたが、警察の力で制裁を加へられました、斯の如き、實例を挙げますれば、數限りもありません。

然らば私共の信仰すべき宗教は、如何なるものでありますか、他なし、完全なる神を

完全に信ずることであり、完全なる神とは如何なる者でありますか、これから少しくお話致して見たいと思ひます。

一、神は愛であります

これは誰れでも申しますことですが、誠に神の愛に沐浴し、神の愛に合体しますれば、世界中之れに越した幸福はありません、抑も此の神の愛は宏大無邊なもので、全世界の凡ての物、一つとしてこの愛から洩れるものはなく、賢者も愚者も、善人も悪人も、凡て一様に此の愛の中に包まれて、而かも救はれ、導かれ、又育くまれて居るのであります。

神の愛は之れを何に例へて説きませうか、此の地球上に於ては、不十分であつても親の心に例へていふより外はありません、親は子供の賢愚長幼の別なく、一様に之れを愛し、善ければ之れを喜び、悪ければ一入その憂ひを増すものであります、基督の御せられた「迷はざる九十九の羊よりも、迷へる一匹の羊を求めよ」といふ神の愛は、即ち神の親心であります。

此の神の愛を最も完全に體した人は基督であります、世界の人類が迷ひの雲霧に悩み罪の闇路に苦しむ様を見て、必ず救出さねば安心出来ぬといふのが、神の御心であり、神の御心は即ち基督の御心であります。

又親鸞聖人は「善人猶ほ以て往生す、況んや惡人をや」と申しましたが、慈悲といふものは斯の如きものであります、斯の如き慈悲が即ち阿彌陀如來の慈悲であります、しかし其の阿彌陀如來は仮想の人で、基督は實在の人であります、基督は神の愛を體して世に來り、愛の生涯を送り、全人類を救ふ爲に御自身を十字架に釘られました、文學士龜谷凌雲氏は、蓮如上人の後裔に當る人で、眞宗の熱心な信仰家でありましたが、此の阿彌陀如來を歴史的に研究して、仮空の人であることを知ると共に、基督が歴史上嚴然と有つた人で、而かも事實此の大慈悲を實現して居ることを知り、深く感じ且つ驚き、家族や門徒達の甚だしき反對があつたにも拘はらず、遂に意を決して基督信者となり、信者となつたのみならず、傳道に努めて居られます。

神の愛、基督の愛は、解れば解るほど、廣大であり深遠であつて、私共の人格は之れによつて淨化され、聖化され、吾が心の中に天國が生じて來るものであります。儒教の方では、「天を敬ふ」と申して、天を愛するとは申しませぬ、神道の方では、「敬神愛國」といふことを唱へまして、神を敬ふことをしますが、神を愛するなどは、曰ひませぬ、嘗て文學士登張竹風氏が「イヂエ」の書を譯註しました其の中に「日本人は神を愛するといふことは出來ぬ、若し伊勢大廟に詣で、天照大神を愛するなど曰ふ者が有らば、恐らく拳骨で擲られるであらふ」といふ意味の事を述べ、又維新の大偉人西郷隆盛でさへ「神を敬ひ人を愛す」と申しました、神の愛すべき事を眞に教へてくれまし

たのは、基督であります、私共の天地の神に對する信仰は、敬に止まらずして、愛にまで至らなければなりません、(固より淺薄な基督教徒の敬の無い愛には感心しませぬけれど)、譬へば子供が外から歸つて父母に逢ひ、言ふべからざる歡喜に満たされるのは愛でありまして、此の歡喜を只單に父母を敬ふの一語を以て盡すことは出來ませぬ、私共の信する神は、私共の父でありますから、之を敬ふと共に之を愛し之を慕ふは、止むに止まれぬ心からであります。

又人々は自分の罪と迷ひとにいたゞ苦惱をもつものであります、けれども父なる我等の神は、之れに對して深き同情と憐みとを寄せらるゝものであります、神は實に我等を愛し、我等も亦神を愛せずには居られぬ性質のものであります。

しかしながら心ある親が其の子を愛するのは、無暗に愛するのではなく、必ず善良なる子となることを希ふて止まぬ者であります、然るに近來親鸞聖人の事を、小説や戯曲に寫してあるのを見ますに、多くは誠の親鸞を解し得ず、男女間の不倫を肯定して、それが人間味であり、又さういふ不倫を許すのが佛の慈悲であるといふやうに寫してあります、誤れるも亦甚だしき言であると言はなければなりません。

抑も人間の愛情には、色々のものが混入し易きものでありますから、私情、利欲、性慾などの混じ來らぬやうに注意しなければなりません、眞の愛の中には義と敬とを含むものであります、即ち如何に切なる愛を持つて居りましても、自他の義を破らず、他の

魂を敬ふものであります、然るに世間には相當學問のある人で、他人の妻と不義の關係を結び、又は人の妻でありながら、他の男と相通じ、而して「戀愛の自由」、「自我の満足」、「偽りなき愛」、「自己の欲する生活」など、稱して、得々然たる者さへあります、かゝる人の心の裡には、義だの敬だのといふものは微塵もありません、さうして此等の人は、「他を救済する」とか、「人格を尊重する」とか申して居りますが、これは救済でなくして誘惑、破壊であり、人格尊重でなくして人格無視、人格蹂躪であります、愛と慾との區別は、義と敬とを含むや否やによつて、明白に判別することが出来ます。

二、神は善であります

基督は私共に教へて「善きものは神なり」と仰せられました、人が靜かに自分の身を省みる時、其の善と惡とを識別し得る良心の有ることを知るであります、此の良心は即ち善なる神から出たものであります、然しながら人の心の中には私我（小我）と本我との二つがありまして、本我は即ち善事を好む心であり、私我は即ち我儘勝手慾の本領を表はすものであります。

今の世界の風潮は誤つた思想や汚れた感情で、此の本我を欺き、又は私我と本我とを混同して、天來の良心の聲を暗まし惡魔の誘惑に傾き、さうして自我の自由、自我の満足など稱して居ります、けれどもこれは本我の抑壓、本我の不満であります、冠履顛倒

とは斯の如きを曰ふのであります。

兎に角人の本性は、善なる神に肖せて造られたものでありますから、一たび罪や迷ひに陥るときは、早晚必ず此の良心の苛責を受けて苦しまなければならぬ者であります、故に或る一派の宗教のやうに、不義不徳に陥ることなく、必ず神の愛を知ると共に、神の善なることを知り、信仰と道徳と兼ね備はつた人とならなければなりません。

三、神は知であります

神の知は天地に滿つる知でありまして、此の知が人の心に分與せられて、人の知となるのであります、私が今諸君に語るのも知であり、諸君が之れを聞いて解るのも亦知であります、又凡ての發明は人の知と神の知と相合する所から出て來るものであります、更に私共の一切の修行も、神の知と相合し相結ぶ事によつて、神知が開かれて來るのであります、此の神知が開かれますときは、宗教に對する一切の見解も自ら明かとなり、宗教の眞偽も鏡に物を映すが如くに判明せらるゝものであります、此の神の知に照らして、之れに合はぬやうなものは眞の宗教といふことは出来ませぬ、眞理に外れて、いかで正しい教といふことが出来ませう、又知と申しましたも知に「學問の智」と、「常識の智」と、「悟道の智」と、「神の智」とあります、學問の智のみを以て、全きものと思ふのは固より間違でありまして、學者には無常識の人が多くあります、此の學問の智

の上に、世の辛酸を嘗め盡して養ひ得らるゝ常識の智が必要であります、又深い修行に由つて得らるゝ悟道の智、即ち天地の大生命に觸れて天地の眞理を直知する知がなくてはなりません、更に向上の一路に進み、愈々清く、益々高く、神の知に合一する者とならなければなりません、人が此の境に到達致しますれば、學問の智や常識の知と異なる識見が開けてまゐり、神の見給ふやうな見方を得るに至るものであります。

それでありますから、私共の知を磨くに當つては、唯新聞雑誌や、演説講話などから得らるゝ一知半解の知を以て足れりと思せず、宜しく世間の風波に當つて得らるゝ常識の知、刻苦奮勵、辨道工夫によつて得らるゝ悟道の知、更に進んで完全圓滿なる神の知を體得することに努めなければなりません。

四、神は誠であります

基督の仰せに「神は誠なるものなり」とありますが、これと同じやうに子思は「誠は天の道なり、之れを誠にするは人の道なり」といひ、孟子は「誠は天の道なり、誠を思ふは人の道なり」といひ、近世哲學の元祖と呼ばるゝデカルトは「神は完全なるが故に一切の圓滿なる徳を具ふ、而して其の圓滿なる諸徳の中、特に肝要なるは、神の誠實といふことなり」と申して居ります、人が眞實に神の誠を識りますときは、今の宗教家のやうに人を欺き瞞すことなど出来るものではありません、今の事業家のやうに誤魔化し

をしたり、虚言を曰つたりすることが出来るものではありません、今の勞働者のやうに人の居らぬ時に怠るやうなことが出来るものではありません。

此の神の誠なる事を識つて此の誠の上に立つ信仰でありますれば、成功と不成功とに心が動いたり迷つたりするものではありません、必ず能く毀譽褒貶の上に超越して泰然たることを得るものであります。

五、神は力であります

神の力は全能の力でありまして、地球の廻轉も、日月星辰の運行も、凡て皆神の力でありまして、物質界、精神界の上に働く一切の力も、亦神の力に外なりません。

パウロが僅か三人の従者と共に、小舟を操り亞細亞から歐羅巴に渡り、全世界に大變化を興へたことも、マルチン・ルーテルが宗教改革を行つたことも、單に彼等の力だけではありませぬ、此の中に無限の神の力の加はつて居ることを知らなければなりません。

人が若し此の力を得るに到りますれば、假令一人の力で幾千万の人を動かす程のものであります、一工場や、一會社の訓練統一は固より、一村一郷、延いては天下國家をも動かす得る性質のものであります、これは神の全能力と合体して、得らるゝ所の力であります。

六、神は美であります

神は實に美なる者でありまして、大詩人とか、大文學者とか、又は大美術家といはるゝ人々は天稟此の美を感じ、此の美を愛する心に富んで居ります、菅原道真や、西行法師や、芭蕉翁や、加賀の千代女や、李白や、杜甫や、セークスピアや、ダンテや、ゲーテや、ラッファエルや、ミカエルアンゼロや、いづれも其の人であります、これ等の人々は普通の人の知り得ぬ天地自然の美妙を感得して、彫刻や繪畫や詩歌文章などによつて、人生に光明と慰安と希望と娛樂とを與へ、又與へつゝあるのであります。

然しながら美は溺れ易きものでありまして、溺れて極端に流れますると、個人も國家も放逸蕩縦に傾き、憂ふべき状態に陥るものであります、之れに反して狹義の宗教や道徳を唱道して、文學美術を蔑視します時は、個人も國家も嚴冷沈鬱に傾き、無趣味の狀態を現出するものであります、斯の如く其の一に偏することなく、文質形々たる人と國とを成さんとするには、宗教も道徳も、文藝も美術も、深く真底に徹して神の心に入り、神によつて調和さるゝより外はありません。

七、神は大であります

説明の順序として、こゝに神の大を説くことゝいたしますけれども、此の大は、大小の大ではありません、即ち比較的、相對的のものでなく、全一絶對の大であります、さうかと申して無念無想の絶對觀に入つた時と同じものでもありません、愛や、善や、知

や、誠や、力や、美や、一切を包容した絶大であります、説明しやうと思つても説明の出來ぬものであります、説明しやうとすれば、其心が既に二となり、相對となります、たとゞ自ら修行し、大悟し、驗知する外はありません。

前に述べました愛も、善も、美も、知も、誠も、力も、此の大から出て來るものであります、今の基督教は重もに其の愛と善とを説くことに傾き、儒教は重もに善と誠とを説くに傾き、佛教、殊に禪宗は重もに知と力と大とを修むるに傾き、淨土眞宗は専ら其の愛を傳ふるに傾き、學者は其の知を明かにせんとするに傾き、詩人や文學者は其の美を感じ、之れを寫し之れを歌ふに傾いて居ります、斯の如く其の一若しくは其の二三に偏して居りますから、現今の複雑した信仰界、道德界、思想界、事業界、政事界等を指導し、統一することが出來ないのであります。

私は此の事實に當面し、之れを内に省み、之を外に照し、苦心實修十九年を経て、此の完全なる神に合一し、基督に合一し、それより今日まで、更に十三年の實修を積み、前後三十四年を経過致しました、故に聽衆の諸君も、之を一片の神學論として聽かず、實験の道として之れを聽き、諸君も亦此の實験に入られんことを切望致します。

然らば完全に信仰するとは、如何なる事であるかと申しまするに、先づ神に「信頼」することが大切であります、しかし其れだけでは足りませぬ、或る人は「基督教は信頼なり」と申し、一にも信頼、二にも信頼と申しますが、私の悟り得た基督の道は、それ

だけにて足れりと致しませぬ、之れに加ふるに「學習」の必要を説きます、學習とは神に學び習ひ、基督に學び習ふことであります、即ち愛も、善も、知も、力も、美も、誠も、大も、神の如く完全ならん事を望んで學習することであり、學習し、「合一」して立派な人格となる事が大切であります、而して其の悟道、安心の境に腰を下さず、パウロのやうに「後にあるものを忘れて、前に在るものを望み」どこまでも、「向上」し、其の向上の大精神を以て、神と人とに「奉仕」し、萬人を聖化し、萬事を聖化し、全世界を聖化すべきであります。

第二 德行

眞正なる信仰には、必ず眞正なる道德の果を結ぶものであります、古來聖賢の人格を見れば、自ら明かであります、世界三大宗教の開祖である釋迦、孔子、基督は、また世界の三大道徳家であることを思はなければなりません。

今の人は概して道德を輕んずる風がありますが、之は畢竟己の慾心を満たす爲めと、己の不徳を蔽ふ爲めに、詭辯を弄するか、或は外來の誤つた思想や、腐つた風習を眞似るからであります。

私共の信ずる神の完全を望み、之れを學び之れに習ふ時、どうして此の不義不徳を良しとすることが出来ませう、道德は古來何れの時代でも之れを重んじ、徳を修め徳を行

ふ者は、人から信用され、不義を思ひ不徳を爲す者は、人から信用されぬやうになります、家に不徳の子があれば、其の家滅び、一村一郡に不義の者多ければ、其の村其の郡は衰ふものであります、天下國家の盛衰興亡も亦然りであります、誠に此の道德の問題は、信仰に次ぐ重要な問題であることを識らなければなりません。

明治政界の巨人星亨氏は、器量膽力共に大きい人でありましたが、此の人は「社會に立て重要なものが三つある、金力、智力、腕力、是れなり」といひ、更に言を進めて「俺には金力がある、腕力も瘦壯士の二三人を相手にする位はある、たゞ智力は常に磨かねばならぬ」といひ、五萬卷の書を集めて勉強しました、然しながら、星氏はもう一つ大に重要な「道德力」のある事を忘れて居りました、これが爲め其の行爲、運動、傍若無人、目的を達する爲めには、手段、方法を選ばなかつたのであります、是に於て新聞雑誌は漸く筆を揃へて攻撃を始めました、智力のある星氏は、こゝに至つて道德力の大切だといふことに心づき、それから謙倉の田覺寺に釋宗演氏をたづね、更に京都の天龍寺に橋本巖山氏を訪ひ、最後に押川方義先生をたづねて道を聴き、意氣相投合し、大いに自ら修養して、共に天下の事を爲さんと致しましたが、世間には此の精神上の變化が知られず、劍客伊庭氏の爲に刺し殺されて仕舞ひましたのは、誠に惜しい事でありました。

星氏ですら斯の如くで有ます、どうか諸君の御考慮を願います、支那の三國時代に、劉

備といふ人がありました、漢の天子の後裔で有ましたが、當時は下つて民間に居り、家が貧しく、自ら荏を織り履を作つて、母に孝養を盡し、傍ら刻苦勉勵して才徳を養ひ、黄巾の賊が蜂起しました時慨然として起ち、三十幾年の艱難を経て、遂に蜀の天子となりました、嘗て此の劉備を殺さうとして、偽り事へた刺客がりましたが、相接して居るうちに深く其の徳に感じ、自ら其の事を白状し、それから忠誠な従者となつた事があります、又世界の歴史に於て第一流の賢宰相といはる、諸葛孔明が、其の一生を献げて劉備、劉禪の二代に事へ、秋風寒き五丈原の陣中に其の遺骸を横たへましたのは、劉備の徳に感激したからであります。

又米國のワシントンの生涯を見ます時、其徳の如何に崇高であつたかを思ひます、ワシントンは第二回の大統領の職を全うし、第三回目に推されましたとき、固辞して受けず、飄然として郷里に歸り、農夫となつて一生を終りました、今に至るも全米國民から「國父」として尊ばれ、慕はれて居ります、維新の英雄西郷隆盛は、亦徳の人でありました、此の人の事は諸君の御承知の事でありますから、今之れを申しませぬ、日本に於ける西郷、支那に於ける劉備、米國に於けるワシントン、いづれも代表的偉人でありまして、徳望の高い人でありました、偉夫の人は、必ず有徳の人であることを忘れてはなりません。

第三 明 知

明知とは明らかな知の意であります、之れを五ヶ條に分けてお話して見たいと思ひます。

一は神を知る明知

知の中で最も大切なるものは神を知る事であり、此の知は一切の知の根元となるものであります、此知には人から聞いた知、聖書や雜誌を讀んで得た知、考へた知、悟つた知、悟を越へた智の別があります、私の今日お話する所は、主として悟の知、悟を越へた知であります、神の全智に觸れて開發する明知であります、知らうと思はずして自然に知る明知であります。

古來の大宗教家は、此の境界に達する爲に、非常の苦心をして修行をしたものであります、斯くして直接神を見、神に觸れて、之れを知るときは、何人が來つて此の信仰を動かさうとしても、決して微塵も動く者ではありません。

私は今諸君の顔を見て知つて居ります、故にたとへ世界の大宗教家、大學者が、悉くこゝに集まつて「汝の見て居る人間は、此の世界に存在しない」と、論理精密、雄辯滔々と論じても、私は確かに見て知つて居るのでありますから、確信して動くことはありません、神を明知する事も亦斯の如く、眞實神を見ますときは、明々白々、自知自證、他人の評論などで動くものではありません、而も頑迷固陋で動かぬのと違ひます。

神を愛し、道を愛し、聖賢の樂みを樂しむ者でなくてはなりません。

二六

かゝる聖賢の心、即ち本我は各人個々具有して居るものであります、けれども此の本我は私我の爲に幽閉せられて、其の本体を見はすことの出来ぬやうになつて居ります、誠に畏れ多い譬であります、後醍醐天皇が、北條氏の爲に、笠置に行幸避難遊ばされました時、忠臣楠正成を求め給ふ有様に似て居ります、本我は天子、私我は北條氏、楠氏は神より遣はされた良師友と見ますれば、能くおわかりになる事と思ひます。

故に眞止に人の本我を尊重する者は、その私我の氣に入らぬ忠言、警告叱責等を與ふるものであります、これが誠の愛であります、基督が「サタンよ我が後に退け」とペテロを叱咤せられ、「噫禍なるかな、偽善なる學者とパリサイの人よ」と警告されましたのは、實に止むに止まれぬ聖愛、熱愛から迸り出でたる言であります。

以上の見方は人の本體を知ることであり、又各人個々の特長を知る事が必要であります、教育上にも事業上にも、各々の人の特長を知ることには又誠に重要な事でありまして、大宗教育家も大教育者も、其他文豪、英雄、名將、大事業家、皆能く人の特性を知る明知を持つて居る者で有りました、孔子が弟子の十哲を評して、「德行には顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、言語には宰我、子貢、政治には冉有、季路、文學には子遊、子夏」と、各々其の特長を稱し、其の特長を發揮せしむると共に、圓滿に進歩せしむるやうに教育しましたのは、實に此の明知でありまして、釋迦、基督も亦然りであります。

又事業の上から考へますれば、適材を適所に置くといふことが、甚だ重要な事であり、ますけれども、これは人を知るの明を有するに非ざれば出来ぬことでもあります、英雄が一代の間に大偉業を成し遂ぐるこの出来るのは、能く人の特性を知り、而して能く之れに任することが出来るからであります、太閤秀吉が北條氏を征服し、伊達政宗を降参せしめた後、東北の要地たる會津の城に、何人を大名として赴任せしむべきかと、試みに多くの大名將士たちに投票させましたところ、「細川忠興」が最大多数で當選しました、此の時秀吉は微笑して「これであるから俺が天下を取つたのだ」といひ、「この重任を全うする者は蒲生氏郷を措いて他に無い」と申し、遂に氏郷を會津に封じました。

現今デモクラシーの叫びが高く、米國の民衆政治を世界に於ける最上の政治のやうに考へる者も有りますが、多数の見るところ必ずしも當らぬことは、前の例でもわかります、無論專制政治や、寡頭政治はいけません、民衆政治だつて最高の者ではありません、其れ以上私どもの進んで達すべき高い政治が有るのであります、支那の古代の「王道」、古代希臘の聖人プラトンの「哲人政治」など、今の世界の政治の進みゆくべき目標を示して居るのではありますまいか、現今の米國の政治なども、哲學上から又宗教上から之れを見るときには、不完全なることが多々あります、私どもは今の歐米の足跡を追ひ尻馬に乗ることを能事として居る學者や政治家に與みすることは出来ませぬ。

二七

四は時を知る明知

凡て働くに時あり、休むに時あり、能く此の時を知ること亦甚だ重要な事でありませぬ、パウロは「我儕は時を知れり、今は眠より覺むるの時なり」と申しました、現今世界の風潮は、不道徳を不道徳と知らぬ變調の時であります、此の變調を正調と見る者の多い時であります。

今の人々は束縛を脱して自己の自由を得たいと望んで居りますが、只單に束縛を脱することのみ希ふは誤りであります、何の束縛を脱するかを考へなければなりません、道徳の束縛を脱して直ちに罪惡の束縛を受くることを自由と思ふのは何たる、過誤でありませう、眞の自由は信仰と修行とに由つて、完全なる神に合一し、罪惡以上、道徳以上に超越し「勉めずして中り、思はずして得、從容として道に中るは聖人なり」といふ境界に到達して、始めて得らるゝものであります。

此變調の時に際して、私共は完全なる信仰と、誤りなき考へと、義しき行とを以て、世界の人々を無明と罪惡との束縛より脱せしめ、誠の自由を得せしむる使命を持つて居ることを信する者であります。

又英雄は時代の作る所で、時代は英雄の作る所と申しますが、徒らに世の變調の波のまにまに揺り動かさるゝやうな人では、とても英雄偉人となる事が出来ぬのみならず、

英雄を知ることすら出来ぬ者であります。

前にも申しました三國時代の聖人諸葛孔明は當時南陽に耕す一農夫で、自然を樂しみて天命に安んじて居りましたが、二十七歳の當時、既に聖域に達した位の人でありますから、能く天を知り、我を知り、人を知り、又時を知り明知を備へて居りました、劉備が三たび草廬をたづねて來たので、之れと會見しまして、天下の形勢を談じ、やがて曹操と孫權と劉備と三國鼎立するに至るべしと、斷言致しました、當時は首都に曹操あり、東吳に孫權あり、荊州に劉表あり、益州に劉璋あり、漢中に張魯あり、西涼州に馬騰あり、豪傑雲の如く存して、劉備は劉表の食客となり、新野の城を守るに過ぎませんでした、然るに斯く明言し、草廬を出て後、劉備を助けて、その豫言通りに致したのは、明知、神に通ずと謂べきであります。

歐洲戦争の起りました時、其の勝敗と、其の戦争の何年續くか、戦後如何になるかといふことにつき、全世界一人として之れを知る者の無かつたことを思ひますと、孔明の明知に驚かすには居られませぬ。

五は事を知る明知

抑も「事」は誰が執りまするか、「人」が採るのであります、而して又事を成すには「時」を要します、能く人を知り、能く時を知り、又能く事を知るのでなければ、到底

大事を成すことは出来ませぬ。

支那の春秋時代に范蠡といふ人がありました、此の人が越王勾踐を助けて呉を滅ぼしました、勾踐の人と爲りは薄情で、難を共にして喜びを共にする人でない事を知り、遂に書を遺して越を去り、陶に逃れました、陶に行き陶朱公と名を改め、巨万の富を作り得ました、范蠡に三人の子がりましたが、其の中次男は楚の國に在り、事に依つて人を殺し、これが爲死刑に處せらるゝことになりました、母は深く之を悲しみました、范蠡が申しますのに「千金の子は市に死なすといふ言がある、金を使つて子の生命を救はう」と其の使に三男を選びました、長男は之れを聞いて、己れ兄の身を以て此の任に當ることを得ないのは、死に勝るの恥であると思ひ「此の任を托されなくば、自殺する、と申しました、母は之れを心配して、夫の范蠡に相談致しました、范蠡は長男を遣はしては、到底其の望みを達することが出来ぬと知つて居りますが、兄を遣らねば兄が死ぬ、兄を喪ふか弟を殺すか、いづれか一人を失はなければならぬと思ひ、遂に兄を遣すことにいたしました、案の如く長男は弟を救ふことが出来ず、悄然として立ち歸りました、母が深く歎きました時に、范蠡は「是當然の結果である、何となれば長男は自分の貧しい時に生れ、金といふ物は容易に出来ぬ者であるといふ考が頭にしみて居る、三男は自分の富んだ時に生れ、金など何とも思つて居らぬ、故に三男を遣はしたらば、惜しげもなく大金を使つて、次男を救ふ事が出来るが、長男にはそれが出来ぬのである」

と申しました、其の人を知り又事を知るに於ては如何に明かであつたでありませう。

凡て事を知るは、宗教、教育、政治、實業、其の他何れの事業にも必要であります、而して、其の事を知るの明知は、學問の知、常識の知のみならず、結局信仰道徳を修めて、眞の悟道に入り、明月靜水に映じ、靜水、明月を寫すが如き明知でなければなりません、而して「事の中に働く神」を觀得るに至らなければなりません。

第四 熱 愛

愛にも色々ありまして、大慈大悲など稱しながら、廣く且つ淡い愛もありますが、それでは人に對し事業に對して、些か物足らぬ感が致します、眞に天下國家を動かし、大事業を成す愛は、廣く大きくあると共に、熱のある愛でなければなりません。

フランシス・サビエーは我國に基督教を傳へた最初の宣教師であります、此の人の偉大なる働きは、實に其の博大にして熱烈なる愛から出ました、彼は「假令我が前に一萬回の死と、死の凡ての狀を列べられんども、我は一人の靈魂を救はんが爲には、誓つて之れを辞せざるべし」と申しました、又彼は他の悪い人の罪を見て、是れ我が罪なりとて、鐵の鞭を以て自分の脊を打ち、肉破れて鮮血迸るに至り、これを見た悪い人は感泣して地に倒れ、即座に悔改して信仰の人となりました、偉人は即ち愛の人、殊に熱愛の人であります。

第五 剛毅

三二

剛毅とは心の強いことでありまして、此の剛毅は、血氣の勇や匹夫の勇と違ひ、信仰道德の上に基礎を立つるもので、其の堅固なることは大磐石のやうでありまして、私我（小我）に執はれて居るやうな人には、決して得られぬ強さであります。

孔子が剛を話しました時、弟子の一人が問ふて曰く「申張は剛でありますか」と、孔子は之れに答へて「根や慾あり、焉んぞ剛なることを得ん」と申しました、慾の有る者は決して剛となることが出来ませぬ。

又其思想が常に動搖し、主義が時々轉化し、氣分が折々變るやうな人は、弱い人であつて、人から信頼される者ではありませんぬ、之れに反して、信仰上にも、道德上にも誠見上にも、又如何なる困難の際にも、泰然として動かぬ人は、万人から信頼される人であり、例へば小兒等が遊び戯るゝ時、庭の亭々たる松の巨木に手を出さず、却つて小さな木を選んで之れにとりつき、之れを揺り動かして、逐には之れを枯らすに至ると同様に、私共にも此の剛毅の心がなければ、往々人から揺り動かされて自分の立場を失ふに至ることを思はなければなりませんぬ。

人心の統一、工場の一、國家の統一、凡ての統一、此の剛毅の精神が無ければ、決して出来ませぬ、偉人は必ず剛毅の精神を持つて居るものであります。

畢竟此の剛毅の精神は、確固不動の信念力と、善事は必ず之れを爲し、悪事は必ず之れを爲さざといふ道德力とによつて、得らるゝのであることを思ひ、此の根柢の修養をしなければなりませんぬ。

第六 勤勞

勤勞に怠るべからざる三つの方面があります。

- 一は自分の修養に勤勞する事。
- 二は人を善くする爲に勤むる事。
- 三は自分の業務に勤勞する事。

修養に志す者は、必ず此の勤勞を厭ふてはなりませんぬ、古來聖賢の爲す所を見るに、萬人に優つた勤勞をして居ります、子思は「人一人たび之れを能くすれば、己之れを十たびし、人十たび之れを能くすれば、己之れを百たびす、果して此の道を能くすれば、愚なりと雖も必ず明かに、柔なりといへども必ず強し」と申しましたが、今日は労働問題がやかましくなつて以來、罷業怠業が宣傳され、實行されました、なるべく労働時間を短縮して、なるべく賃金を多く得たいといふ思想と傾向を生じました、之れが爲に一般の人の勤勞を厭ひ、能率を減殺したことが多大なものであります、固より資本家たる

者は、適當なる時間の限定をなし、適當なる利益の分配をなすべきであります。勞働者や、一般多數の勤勞を厭ふことは、甚だ宜しからぬ事であり、これは決して自分の爲めならず、却つて不幸を招くことであります。

凡て自分を修むる事でも、事を務むることでも、普通以下にする者は、普通以下の人となり、普通以下の成績を擧ぐるに過ぎませぬ。普通にする人は、普通の人となつて、普通の成績を擧ぐるに止まります。普通の人に幾十倍優つた勤勞することに由つて、偉大の人格となり、偉大の事業を爲すことが出来るのであります。

昔から「寸陰分陰を惜む」と申して、聖賢は何れも時を惜しんで修養し、人よりも優つて業務に勤勞する心がなければ、どうして一世を震動せしむる力を養ふことが出来ませう。

徒らに空論虚語を喜び、饒舌駭辯を弄び、又善からぬことを思ひ、善からぬことを爲して、此の大切なる時を空費することなく、必ず此の時を惜しんで修養し、此の時を重んじて己の業務に勤勞すべきものであります。己の勞を惜しみ、又は避くることを考ふるほど、益のやうで損な事はありませぬ。

熱愛燃ゆるが如く人を思ふザビエーの心の裡には、己の勞を厭ふ心などの出て来る餘地はありません。

あらゆる機會に遭遇する度毎に、己を獻げて人を愛し、己を獻げて事を愛し、己を獻

げて勤勞することを思はなければなりません。而して業を務むるに當つては「何人が自分に代つて勤めても、これ以上には出来ぬ」といふほど、誠意をこめて爲さねばなりません。人世の馳せ場を走つて、世界第一等の榮冠を得る者は、必ず世界第一等の勤勞者でなければなりません。

以上申し述べました六つの者は、偉人の特點でありまして、此の六つの者が、渾然として統一され、融和されて居るのが、即ち眞の偉人であります。

此の六つを貫くに、誠の精神を以てしなければ、なりません。虚言を吐いたり詐術を行つたりすることなく、小成に安んずることなく、不徹底に終ることなく、信仰も、德行も、明知も、熱愛も、剛毅も、勤勞も、其の一つ／＼悉く誠實の精神が籠るものでなければなりません。「英雄の第一特性は至誠なり」とカールは申しましたが、英雄偉人には、此の天稟の誠の心の息み難きものがあります。間に合はせや、不徹底に終ることの出来ぬ性質を有つて居るものであります。私共も全心全力を盡して、神を愛し、己を修め、業を務めて行きますれば、道は自らに開かれ、靈化は來り、光明は輝き、偉大な人格となつて、偉大の働きをなすことが出来るものであります。懶惰放逸を事として、偉大の人とならんとするは、恰も木に縁つて魚を求むるが如しであります。必ず發憤努力勇猛精進して偉人の心を體驗し、偉人の力を體得せられんことを望みます。

(終)

すべて善き樹は善き果をむすび、悪しき樹は悪しき果を結ぶ。善き樹は悪しき果を結ぶこと能はず、悪しき樹は善き果を結ぶこと能はず。すべて善き果を結ぶ樹は、伐られて火に投げ入れらる。然らば其果によりて之を知るべし。
(馬太傳七〇七七一二十)

一粒の麥、地に落ちて死なざれば唯一つにてあらん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。己が生命を愛する者は、これを失ひ、其生命を惜まざる者は、之をたもちて永遠の生命に至るべし。
(約翰傳十二〇二十四)

まづ神の國と其義を求めよ、さらばこれ等のものはみな汝等に加へらるべしこの故に明日の事を思ひ煩ふ勿れ、明日の事は明日思ひ煩へ、一日の苦勞は一日にて足れり。
(馬太傳六〇三十三、三十四)

二、正大なる生活

大正十一年四月十六日松江教會に於て基督教信者のために

川合先生

目を覺し、堅く信仰に立ち、雄々しく且つ剛かれ、一切の事愛を以て行へ。

哥林多前書十六章十三、四節

このパウロの一句を基とし正大なる生活と題して、パウロの心を解き、基督の道をお話しいたして見たいと思ひます。

我國にも歐洲に於て發達いたしました社會主義の思想が浸入いたしました以來、生活問題が頻りに喧ましく論議せらるゝやうになり、近來は又文化生活など、盛んに主張せられまして、このことを申さぬものは時代遅れのやうに申して居りますが、其の内容に至つては、少數識者の議論を除く外、多くは甚だ貧弱なるものでありまして、權利の問題、分配の問題、衣食住の問題が重でありまして、家の構造をどうするか、衣食の事を如何に改良するか、物質的の生活又は文明的のハイカラ生活に過ぎませぬ、かゝる問題も固より重要なことでありますけれども、眞の信仰を持ち眞の修業をして居る人から之れを見れば、まことに小さい問題で、決して「正大」なる生活などいふべき内容を

有つて居りませぬ。

又この「正大」といふ言葉は、西洋にも「正義」とか「偉大」とか申す語があります。が、果して「正大」とは如何なる意味のものでありますか、簡単なパウロの言葉の中に明らかに之を解いて居ります。私が此の「正大」の二字を選び出した來歴をお話致します。と、彼の名高い通俗三國誌を讀んで、諸葛孔明の正大なる人格にいたく感激いたしました。孔明の死後、蜀帝の詔、杜子美の詩、蘇東坡の廟の記の後に、延平の李先生、朱子に謂つて曰く「孔明は子房の從容たるに若かず、子房は武侯の正大なるに若かざるなり」といふ句がありました。李先生は朱子の師匠であります。其の人の評に、孔明「武侯」は子房「張良」の有事多端の間にも常に悠悠として迫らざる處に及ばないが、子房は孔明の正且つ大なる處に及ばぬとありました。誠に孔明の生涯は「正大」なるものであります。今日信仰問題を考へる人々の中、往々信仰は信仰、生活は生活と、別々に離して居る人がありますが、これは誤であります。信仰の中に生活あり、生活の中に信仰ある、所謂信仰の生活をする様にとめなければなりません。一方には、生活の爲めに人を欺き、傷けても私腹を肥し、一方には、寺院や教會に入つて説教を聞き、又は自ら祈禱をし念佛をして得々然たる者のあるのは、何たる矛盾でありませう。

信仰が人格の上に活き、信仰が生活の上に表はるゝ様にならねばなりません。かくなつてこそ、私共の信仰が正大であり、又生活が正大であるといふことが出来るのであります。パウロの此の句は、誠に善く正大なる生活の意義を盡して居ります。順序として先づ、

第一 目を覺す

パウロの目を覺すといふ意味は、目を開いて居れば、目を覺して居るといふのと違ひます。世間多數の人々は、目を開いて眠つて居り、睡つた生涯を送る人が誠に多いのであります。パウロは只「目を覺せ」と柔しく申しましたけれども、支那の禪學五派の中の雲門宗の開祖である雲門大師は「平地上に死人無數」と申しました。この雲門の語を採つて、パウロの心を曰へば「平地上に睡人無數」といふ事が出来ます。これは信者であるコリントの人々に送る手紙であります。世間にはパウロの曰ふが如くに、目を開いても眠つて居る者が多く、雲門の曰ふが如くに、生きても死んで居る者が多く、道を説く者も多くは睡りながらに之を説き、又聞く者も亦睡りながらに之を聞いて居るのであります。まいか、誠に自分自身が果して睡りより覺めて居るか、未だ睡りより覺むるに到らぬかを考へべきであります。パウロの此の言葉は、謂はゞ、睡の中より搖り起し、且つハツキリと喚び覺ます力の有ることを思ひます。人の睡りより覺めますことも、初めは朦朧状態から徐々に明かになり、遂に覺醒状態に至るやうに、精神界の覺醒も亦然り

でありまして、或は半ば、或は七八分、漸く全く醒むるに至り、更に進んで明かな大覺醒に至るものであります。彼の王陽明は、支那に於て道徳的哲學的政事的軍事的の大天才でありまして、當時若し野心を起して天下に縦横したならば、支那の帝王ともなり得べき人でありましたが、此の俗界の名利を取らず、幾多の艱難困苦を経て、陽明學派の開祖となつた人で有ますが、其の陽明は「我道九死一生の中に之れを得たり」といひ、又其の作つた詩の中に、「四十餘年睡夢の中」といふ句がありまして、それから目が覺めて見ると、月は既に高く上つて居る、けれども多くの人はまだ睡つて居るから、起つて鐘樓に登つて曉鐘をつくといふ意味の詩を見ましたが、實に一たび覺めて世の中を見、人がまだ覺めずして迷霧の夢中にあるのを見ると、誠に氣の毒で、之れを呼び之れを覺まし之を救はずには居られぬものであります、はじめに歐羅巴に道を傳へたパウロも亦然りでありまして、パウロが基督教撲滅を計り、ダマスコに至る途中、天の光に打たれて地上に倒れ、初めて迷の夢から覺め、「主よ我に何をなさしめんと爲給ふや」と問ひ、主基督の命を聞き、万人を罪の睡より覺まして、救の道に入るゝことに奮闘努力致しました。

この覺め方は人各一様ではありませぬ、己の汚れた心と、罪深き身とを省みて、心の清からんことを希ひ、罪より救はれんことを思ふて、基督の救を體驗し、さうして覺醒する人があります。ルーテルの如きはそれでありまして、又理性の上から深く疑ひ深く考

へて、それから覺醒する人があります、デカルトの如きそれでありまして、又天の光を愛けて忽然覺醒したパウロのやうな者もあります、斯の如く良心の上から、理性の上から、直接天の光から、覺醒する経路は種々でありまして、或る一派の基督教の名士の論に、「基督教には、罪を悔改むるといふ門より外に入ること能はず」とあのやうなものではありませぬ、釋迦も、道元も、生死問題、無常觀から覺醒し、私も亦一年に五人の慈母兄弟を失ひ、これが爲めに悲痛やるかたなく、未來の有無と、靈魂の滅不滅と善惡の應報との問題を考へ、それから道に入りました、罪の悔ひ改め、基督の救ひ、其の他の經驗は、後年に至つてから得たのであります、兎に角私共の身に襲ひ來る各種の困難や苦痛は、凡て神が慈愛の御手を垂れて、ゆり起し喚び覺ますのでありますからこの際必ず遁れ避くることをせず、良心をくまらますことをせず、善い加減に誤魔化さず不徹底な解釋に留まらず、徹底的に解決し、徹底的に救はれ、徹底的に覺醒すべきであります、三十餘年の昔、私の知つて居つた一人の人が、當時この良心の訶責を受けて苦んで居ましたが、其の人は「僕は自分の罪深く心汚れてをることを思へば、若しくてはまらぬ、苦しい時に煙草を吹かしてこの憂きを忘れる事にして居る」と申しましたが、これが爲めに三十餘年後の今日も、尙ほ覺醒するに至らず、同じ世間並みの人でありま

然らば覺めて後如何に立つべきか、パウロは「堅く信仰に立ち」と申しました。

四二

第二 堅く信仰に立つ

この立つといふことも、言ふは容易いことではありますが、果して自分の精神が、如何に立つて居るか考へますときに、これまた中々のことでありまして、孔子は「十有五にして學に志し三十にして立つ」と申しました、十有五にして學に志すとは、年十五の時既に覺醒して、聖賢となるべき志を立てたのであります、それから十有五年の修業を積んで、始めて道の上に立つて動かざるに至つたものであります、又宗教改革者のマルチン・ルーテルは、ウオームスの會に臨み、正々堂々、自己の所信を述べ終つて後、「吾こゝに立てり、他になすところを知らず、神よ吾を助け給へアメン」といひました、滿堂其の威力に壓せられ、しばし聲がなかつたと申します、「吾こゝに立てり」といふこの言は、ルーテルの考へでなく、感じでなく、實にルーテル自身の境涯から出た生命の言でありますから、かくも大威力を表はしたものであります、即ち覺醒して堅く信仰に立つた結果に外なりません。

かゝる確固不動大磐石のやうな堅さは、世間に多く見る頑迷固陋の固さとは違ひ、己を空うして神と合体し、さうして得らるゝものであります、ルーテルや孔子のやうな謙遜の心の中に、神の大生命が宿ることによつて、かくなるものでありますから、帝王も學者も皆一樣に耳を澄まして之れを聴き、愚者も智者も己を空うして之れに従はずには居られぬものであります。

然らば私共の信仰は、如何なる神を信すべきでありますか、曰く、神は眞善美愛であります。



これから順次にお話申して見たいと思ひます。

(一) 神は眞であります、私はこの眞の一字の中に、誠實と眞理との二つをこめて見たいと思ひます、私共の信する神は、誠實に存在して居る神で、間違ひのない眞理の神でなければなりません、今日もさうであります、パウロの時代には、非常に迷信が多かつたやうでありまして、彼は「靈明かに曰ふ、後に至らば、或る人信仰の道より離れて人を惑はす靈と惡鬼の教へと心を寄せん」と申して居ります、今の人等の、宗教上の靈的經驗といふうちにも、或る一種の變体心理的のものがあつて、又靈にも人を迷はす惡靈もあります、此等の事を知らずに、世間の奇を求め、流行を追ふ人々は、此等の事を知らずに、新しい宗教や、はやる宗教を以て良しとして、之れに迷ふ者が多くあ

四三

ます、新らしいと流行するものが、必ずしも善いといふもので有りませぬ、只今パウロの神の靈から直示された言葉のやうに、眞の信仰から離れて、悪霊、悪鬼の奴隷となる者がありますから、斯の如き者とならぬやうに、誠實の心を以て眞理に照らして深く考ふべきものであります。

パウロは又「眞理に逆ふて能なし、眞理に従ひて能あり」と申しました、眞理に外れた宗教であれば、説く者、信する者、共に邪道に陥るものでありますから、能く正しい判断を以て取捨すべきものであります。

(二) 神は善であります、基督は「一人の外に善き者はなし、即ち神なり」と仰せられました、眞理が神であると共に、絶対善とか、至善とか、又はカントの言つた無上善とかいう様に、神は善なる者であります、私共の信する宗教の良否は、眞理の上からと、この善悪の上からと、判別する事が肝要であります、基督は「善き樹は善き果を結び、悪しき樹は悪しき果を結び、善き樹は悪しき果を結ぶこと能はず、悪しき樹は善き果を結ぶこと能はざるなり、故に其の果によりて之れを知るべし」と仰せられました、如何に新らしくとも、如何に流行するとも、其の人の人格と事業との上に結ぶ果を見るときに大抵は善か悪か自ら明らかとなるものであります、人を欺き、世を棄し、不義不徳を取てするが如き悪果があらば、如何に流行するとも、之れを眞正なる宗教といふことは出来ませぬ。

(三) 神は美であります、神は眞にして美、善にして美、愛にして美であります、神は眞は美なり、善は美なり、美は美なり、愛も亦美であります、この美が、眞實に人格の上に結びますれば、徳は愈々清く深く、且つ高く廣く、而かも圓熟して柔和謙遜なるもののであります、基督は「吾れは柔和にして謙遜なる者なり」と仰せられ、又孔子は弟子から「温良恭儉讓」といはれ、佛道の方では「柔和忍辱」とか、「慈悲忍辱」とか申して居ります、それでありますから、基督、釋迦、孔子の肖像を見まするときに、ナホレオンや、クロムエルと異りました、慈悲温和、老幼も男女も、善き者も、悪しき者も皆一様に懐くやうに畫かれております、これこそ誠の美で、又無上の美であります、世間には徒らに形體の美を粧ふことにのみ腐心して、己が自然の美、純潔の美、徳相の美を破壊し、又人の美をも破壊して顧みない者の多いのは、誠に痛惜の至りであります、能く世の中の實情を調べて見ますと、悪漢といはれる者の中に、容貌の美しい者が少なからずあります、かゝる人は他人から慕はれ、なづかれ、又信せられて、罪の上に罪を重ねて、遂には大罪悪人ともなるものであります、彼の色魔といはるゝ者に至つては殊に然りであります、嘗て本間俊平さんの處で世話をされた或る一人の男は、五百人の婦人の貞操を蹂躪したさうで、其の中には上流の貴婦人もあつたといふ話です、この人は本間さんの信仰と熱愛とで正道に立歸られたといふことです、又明治から大正に亘つて、有名な毒婦、姦婦、騙婦、妖婦等を調査して見ても、皆美人でありまして、こ

これらの人々も、始めは心も形も共に人の羨む立派な者でありましたが、己の美を誇る心に、不良の男子どもから附け入れられ、又は心を寄せられて、遂に怖いしき魔界に沈むに至つたのであります。概して女子は、男子より善くならなければ、男子よりも却て悪しくなるといふ極端な性質を有つておるものでありますから、深く謹んで其の生涯を善美にし、醜名を社會に流すことのなきやうにつとむべきであります。西洋に於ては、女子の羞恥を甚だ重んじて居ります。處女の羞恥は眞潔と相伴ふものであります。眞潔の徳を破りますと、羞恥の美も亦共に滅びて仕舞ひます。

精神容貌二つながら美である人は、元より幸であります。しかし評判の美男美女から醜名を世間に遺す惡漢毒婦も、初めは己が美貌を誇る心が根になつて、斯の如き結果を來すことを思ひますれば、深くこゝに注意すべきものであります。即ち誠の美は眞なり善なり、愛なりと思ひ、深く内省して美を深き心の奥に求め、更に高く神の衷に求めなければなりません。

(四) 神は愛であります。神の愛は、眞善美の凡てを含む大なる愛であります。愛の事については、後に更にお話申し上げます。

私共の信する神は、只今述べましたやうな神であります。この神の愛に信頼するのみならず、其眞善美愛に合一して、その行ふ所、言ふ所、凡て神の御旨に合ひ、靜中にも動中にも、人に對する時も、事業に對する時も、常に神と偕に居り、神と共に働くことの出來るやうに務め勵まなければなりません。

斯の如き信仰を以て、斯の如く務めてまゐりますれば、必ず堅く信仰に立つことが出來ます。立たうと思はなくつて、自然に立つやうになるものであります。

第三 雄々しく

次にバウロは「雄々しく」と申しました。舊き譯には「丈夫の如く」とあります。然らば雄々しきとは如何なるものか、丈夫の如くとは如何なるものか、之を説明するには孟子の言葉が一番適切であると思ひます。

孟子は大丈夫といふ者につき、景春に答へて「天下の廣居に居り、天下の正位に立ち天下の大道を行ふ、志を得れば民と之れに由り、志を得ざれば獨り其の道を行ふ、富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、此れ之れを大丈夫と謂ふ」と申しました。誠に「雄々しき心」「大丈夫」の魂を寫し來つて尽せりであります。「天下の廣居」とは、廣く人を愛する仁を指してゐます。即ち天地一ぱいの仁愛の中に居ること、これほど廣い住居はありません。

「天下の正位」とは、禮のことで、日月星辰の其の位にあつて運行する事も禮であり、人々の有るべきやうにあることが禮であります。この「あるべきやうに」といふ七字は明慧上人の語で、佛道の極意こゝに在りとの話であります。

「又「天下の大道」とは、義を指して居ります、現今日本人の思想感情を支配する最も有力なるものは、親でも、教師でも、また宗教家でもなく、新聞雑誌であります、この新聞雑誌の経営方針について、或る人の語るところを聞きますに、巧みに讀者の好奇心に投ずることを主眼とするこの話であります、是非善悪などに重きを置かず、好奇心を利用して、部数を多く賣ることを競ひ、風を害し俗を紊すことを顧みず、讀者も亦殊更に之を喜ぶ傾向のあることは、誠に驚くべき事ではありませぬか、かくて子女は其の父母と衝突し、親は其の子を棄て去り、妻は夫に離れて姦夫と走り、夫は妻を見捨て、他の婦に戯れ、腐敗亂倫、停止する所を知らず、さうして之れを新舊思想の衝突といひ、個性の尊重といひ、自己の自由、自我の満足などいふて居ります、誠に憐むべきことではありませぬか。

必ずよく父は父たり、子は子たり、夫は夫たり、妻は妻たり、教師は教師として、宗教家は宗教家として、政治家は政治家、事業家は事業家、新聞雑誌は新聞雑誌として、各その有るべきやうに、所謂正位に立つて大道を行ふべきものであります。

次に「志を得れば民と之れに由り、志を得ざれば獨り其の道を行ふ」といふのでありまして、孔子の生涯の如きは、即ち其の最高の模範であります。

誠に丈夫の希ふところは、道を行ふて天下國家を救ひ、世界人類を導くことにあります、聊かも名を求め利を養ふものでありませぬから、富貴の爲めに心を淫し、貧賤の爲

めに心に移すといふやうなことはありませぬ。

又天を信じ神を信じてこれと偕にある丈夫の心は、威武の爲めに屈するといふやうなことはありませぬ。

斯の如きは、誠の大丈夫で、眞の「自我實現」とは、これを曰ふので、此の自我は即ち本我、我儘勝手な小我や、私我と異なることを知るべきものであります。

第四 剛 か れ

剛いことに三つ大切なものがあります。

(一) は學ぶに剛いことであります、學ぶといふ精神は實に大切なものであります、此の精神が孔子やパウロの如く剛くなりなりましたならば、向上して止むこと能はざるに至るものであります、孔子は「我は生れながらにして之れを知る者に非ず、古を好み敏にして之れを求むるものなり」と申しましたが、此の古の大道を好んで敏にこれを求め、剛く學んで倦まざりし所に、孔子の不斷の進歩があつたのであります。

(二) は守るに剛いことであります、私共は學ぶに剛いと共に、守るに強くなければなりません、折角苦んで得たものをも、一朝にして之を失ふことがあります、人には各々長短があります、長所に向つて襲はるゝ時は敢て破るゝものではありませぬが、一度己の短所を襲はるゝときは、脆く破るゝことのあるものであります、例へば敵陣の虚を衝

々が如くに、惡魔も亦吾人の弱點を襲ひ、一舉にして陥落せしむる事があります、「既に天にまで擧げられたるカペナウチンよ、また陰府に落さるべし」と基督が仰せられた如く、再び地獄に落さるる事は、守るに堅からざる結果であります、「百年之れを成して足らず、一日之れを壊りて餘りあり」と、古語にある様に、何十年の修業を積んで、一日にして之れを破ることも往々あるものであります、ヤコブの子ヨセフは、才智力量共に勝れたものでありましたが、エチプトの顯官ホテバルに任へ、重く用ゐられて居りました時、ホテバルの妻はヨセフの美貌に戀着して、頻りに誘惑を試みました、けれども固く之れを御けて、「我いかで此の大なる惡をなして、神に罪を犯すことを得んや」と申し、自他の貞潔を全ふしました。

(三) は行ふに附いごとであります、孔子やソクラテースやパウロのやうに、勇猛敢爲の精神を以て、眞理を實行し、善事を實行すべきであります。

第五 凡ての事愛を以て行ふ

此愛の問題は、前にも少し申し述べましたが、若し誤まれば、慾を以て愛と混同し、人を害し己を害して、自ら知らず、知らざるのみならず、却つて得々として居る者さへ多くありまして、誠に惜むべく悲むべき事でありませぬ、然らば眞正の愛とは如何なるもので、又如何にして之れを養ひ得るかを考へなければなりません。

(一) は神を愛することでありませぬ、此の神を愛する愛が根底になつておりませぬと、男女の間の愛でも、終には流れて慾となり、終生拭ふことの出来ぬ汚点を印するに到るものであります。

然らばパウロの考へた愛とは如何なるものでありますか、コリント前書の十三章に「愛は寛容にして慈悲あり、愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、非禮を行はず、己の利を求めず、憤らず、人の惡を念はず、不義を喜ばずして、眞理の喜ぶところを喜び、凡そ事慰び、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事耐ふるなり」と、明かに説いて居ります、斯の如き愛はどこから出て来るかといふに、パウロは「誠の主意は愛なり、即ち潔き心と善き良心と偽なき信仰より出づと申しました、これはパウロの深い體驗から出て來た言葉であります、誠の愛は私とか欲とかいふものを離れて、人を慰め、人を憐み、人を罪と迷ごから救ひ出し、人を善より善に導くといふ潔い心から湧き出る者であります。

又良心の中にも、善き良心と惡しき良心とがあります、この良心の本質は固より善なるものであります、善き良心と惡しき良心との異なる筈の者ではありませぬけれども、之れを磨くと磨かざるとに由つて、明るいと暗いとの別を生じ、其の働きに善惡の差を生ずるものであります、丁度天候の晴曇に随つて、太陽の明暗を來し、善い天氣とか、惡い天氣とかいはるゝやうなものであります、人の良心も迷の曇や、罪の霧に鎖さるゝと、自ら曇り且つ暗くなるものであります、聖き信仰と深い修業とによらなければ、善き良

心となることが出来ませぬ、只今のある一派の文藝家や、評論家等のやうに、不徳不義を敢てし、而も之れを讚美するやうな、暗い良心を有つては、とても罪と迷の何たるかを知らず得ることは出来ませぬ。

これについて甚だ極端な一例を挙げますと、徳富健次郎氏の書いた「寄生木」といふ小説の主人公篠原良平の父が、或る事件の爲め、無實の罪で、牢獄に繋がる、身となりました時、此の牢屋の内に、親殺しの大罪人がありましたが、其の囚人は、「自分が人の親を殺したら悪かんべエけれど、自分の親を殺したのに何が悪いことがあんなべエ」と、曰つたやうであります、儒教では「五刑の屬三千、罪不幸より大なるはなし」と申し、佛教では五逆罪の一として、親殺しの罪を數へて居ります程でありますのに、此の男は憚る所もなくかやうな言を申して居ります、此の男の良心は斯の如く暗く、斯の如く悪しきものであります。

信仰や修業の深い人は、普通の人等の罪と考へぬ程のことをも、罪と考へ、所謂「罪惡觀」の爲めに深く苦しむものであります、これは良心の明かであるが爲めに外ならぬものであります、かく大苦痛を経て、大新生を得るのであります。

現代の多くの評論家は、吾々は誠に弱い人間である、此の弱い所、迷ふ所、罪に陥る所に入間美があつて、此の弱点や、迷執や、罪惡は、愛すべくして答むべからずと申し居ります、普通の文藝上の目からは、こゝにいふ見方もありますけれど、高尚深奥なる

文藝上の眼と、道徳上、宗教上の目からこれを見ますと、これは眞に人間を理解し、眞に人間に同情を有つた評論ではありませぬ、暗い良心、暗い行爲に同情を表し、それを善しとするその人は、同じく暗い心の人と謂はなければなりません、かゝる暗い良心は、相當信仰有る者にもあることであります、此れは時代を導くべき善の信者が、逆まに時代に感化されたものであります、私共の愛に、若し偽なき信仰が根底となつて居りますならば、其の中に潔き心と、善き良心とが伴ふておるべき善のものです、斯の如くして眞に神を愛し、人を愛する愛が出来るものであります、私共はこの三つに照して、己が如何に神を愛し、人を愛するかを反省考察することが最も大切であります、完全なる愛に於て、有史以來第一等の人は、基督であります、基督は「父の命する所の外は、我之れを行ふこと能はず」と、仰せられました、「父の命する所」とは、聖書や論語に載せられて有る通りを行ふといふ意味のことではなく、直接に神から命せらるゝものであります、他の者の容易に模倣し得ぬ所であります。

私共の信仰状態も、かやうに神との關係が密になつて、孝子が親の命を喜んで之れを爲すやうにならなければなりません。

(二) は人を愛することであり、基督の愛は万人を救ふ爲めに、十字架にまでお上りになりました、基督の事は、皆様のよく御存知の事で御座いますれば、之れを略し、孔子の例を少しお話しして見ます、孔子の音樂の師匠で、盲目の冕といふ人が、嘗て

孔子を訪ねましたところ、冕が階段の處に來ました時に、孔子は「そこは階段でありま
す」と教へ、座席の處に參りますと、「そこは座であります」といひ、座につきまする
と、左右に列ぶ弟子たちの姓名を、一々之れに紹介いたしました、其の行き届いた親切
は、孔子の師に對する愛から出たものであります、このことにつき、子張が孔子に尋ね
て、「師と言ふ道でありますか」と申しましたら、孔子は之れに答へて、「然り、固に
師を相すくる道である」と、教へました。

(三) は業を愛することであり、業の中には傳道、教育のやうな精神上無形の事業
と、機械工業その他有形の事業との二つがあります、何れの業に致しましても、社會を
害する業でない以上は、これは天より命せられた職分であるに信じ、之を愛して、之れ
に當ることが最も大切なことであります、業務を以て唯生活の方便とせぬやうに心すべ
きことであります、金を得ることを目的に仕事をする者は、或は冷酷吝嗇、たゞ取りこ
むことばかり考へる人となり、或は奢侈傲慢の人となり、或は嫉妬紛争を事とする者と
なり、或は樂隱居を欲する人となり、其結果は實に憂ふべく怖るべきものであります。
孔子が「仁に當つては師に譲らず」といひ、禪家が「機に臨んでは師に譲らず」と申
しましたる如く、私共が自分の職を執る時に當つては、何人が自分の位置に代つても、
これ以上に出來ぬといふほど、正心誠意之れを務むべきであります。
かやうにいたしますれば、其中に自ら非常な喜びと楽しみとを得て、執務即ち娛樂、

執務即ち幸福なるものであります。

誠に神を愛し、人を愛する精神が、愈々清ければ愈々深く、「人は神の姿に肖せて造
られた」といふ神の意に反かす。己も人も段々と神に肖て來る様になるものでありまし
て、人生これより以上の楽しみはなく、何物を以ても換へることの出來ぬ楽しみでありま
して、自分も之れを喜び、人も亦之れを喜ぶこと限りなきものでありまして、かやうに
なつてこそ、始めて「友あり遠方より來る」といふ樂みをも、得らるゝのであります。
此の心を以て、現今の事業家、労働者、政事家、社會運動者、教育家、宗教家の多く
が、名利の心を脱し得ない所を見、多数の人々が、我利と私欲と不義と不徳の巷に迷ふ
所を見ますと、基督の仰せられた「牧ふ者なき羊」を見るが如く、之れを憫み、之れ
を愛する情禁じ難く、如何にもして之れを救ひ、之れを導かんことを思ひ量るものであ
ります、これが眞の愛であります。

然しながら、名聞利養を以てこれを事とする人々から之れを見ますれば、甚だ不遇者
の如くに見ゆるかも知れませぬ、けれども、其の實は甚だ以て幸福でありまして、ロツ
クフエラーの富よりも、英國皇帝の位よりも、勝つて幸福なるものであります。

仕事に忠實に、親切に、正直であることは、英國人の特色であります、所謂マーチャ
ント(商賣人)の義は、「嘘をつかぬ」との意味がありまして、日本商人の「商賣は嘘
のもの」といふ見地とは、餘程の相違であります、これが爲めに日本の製品は、世界の

貿易場裡から次第に驅逐されつゝありまして、前途非常に憂ふべき状態にあります。斯の如き時に當つて、私共に眞に目を覺して、堅く信仰に立ち、雄々しく且つ剛く、一切の事愛を以て行ふやうにしなければなりません。かくなつてこそ「正大なる生活」を送る人と謂ふべきであります。

終りに一言申し上げたく思ひますことは、かやうな正大なる生活を送ることは、何日からこれを始めますか、これは明日といはず、今日から、否只今すぐから開始すべきものであります。この「今」こそ重大な時でありまして、この時を捨て、何日この時を得られませう、人の向上進歩するに否とは、この「今」といふ問題に徹底するか否かに依るものであります。若し眞面目にこの事に心して、我々として怠らなければ、一年にして其の人格と生活とは一新して參るものであります。故に此の講話を聞きましても、只筆記に止めずまた在來の小知小見を以て、批判し、自分の氣に合ふものは之れを採り、合はぬものは之を捨て、顧みずといふ風のことをなさず、誠に能く信じて之れを行ふことが、大切であります。

今この心を以て始めますと、この今は、繼續して一日となり、一日は繼續して一ヶ月となり、一ヶ月となり、二年、三年、五年、十年、二十年、三十年、終には生涯となるのであります。かゝりになつてこそ、私共の生涯は正大であります。以上述べたことも、聖書の説明でなく、一身を以て説明し、生涯を以て解釋することになるのであります。

ます。

救世軍の創始者ウヰリアム・ブースは、「汝自ら一個の使徒となりて、使徒行傳に今一章を追加する」と申しました、私共も今パウロの教を研究するのでなく、必ずパウロの如き人となり、パウロの如き「正大なる生活」を送ることを期すべきであります。

人自ら信仰ありと言ひて、もし行爲なくば何の益あらん、斯る信仰は彼を救ひ得んや。……汝信仰あり、われ行爲あり、汝の行爲なき信仰を我に示せ、我が行爲によりて信仰を汝に示さん。……斯く人の義させらるゝは、たゞ信仰のみによらずして行爲によることは汝等の見る所なり。……靈魂なき體の死にたる者なる如く、行爲なき信仰も、死にたる者なり。

(雅各書二ノ十四、十八、二四、二六)

凡て我が愛する者は、我これを戒め、これを懲す。この故に、なんぢ
勵みて悔改めよ。視よ、我月の外に立ちて叩く、人もし我が聲を聞き
て戸を開けば、我その内に入りて彼とともに食し、彼も亦我とともに
食せん。
(約翰黙示錄三ノ十九、二十)

汝義に通る勿れ、また賢に通る勿れ、汝なんぞ身を滅すべけんや。汝
惡に通る勿れ、また愚なる勿れ、汝なんぞ時いたらざるに死ぬべけん
や。
(傳道ノ書セノ十六、十七)

我をよびて主よ主よといふもの、盡く天國に入るにあらず、唯これに
入るものは我が天にいます、父の御旨にしたがふもののみなり。
(馬太傳セノ二十一)

三、人格と事業

大正十一年四月十六日松江市役
所樓上に於て一般有志のために

川合先生

只今は主催者のお方から過分な御賞讃のお詞を賜りまして、誠に汗顔の至りござい
ます、私は不幸にして昨今氣管と咽喉とを痛めまして、聲を大きく出すことができませ
ん爲に、皆様に對して十分御満足と與へることはできせぬかも知れませんが、併しお話
申上げますことは、私が精神上の修行を始めましてから三十四年間、今日に至るまで、
實驗し繼續して居ります事柄でありまして、教育及び傳道の方面に就きまして、二十
年間、男女の學校、教會、新聞雜誌社等に働き、夫から郡是製絲株式會社に参りまして
十四年間成るべく隠れて、成るべく沈黙を守つて、自分の理想を實際の上に現はすやう
に骨を折りました、其の間に經驗を積み、只今は同會社二十幾ヶ所の工場、一万一千有
餘の人々に應用して、實蹟の擧がつて居ります事柄でございますから、どうか其のおつ
もりで、聲は悪く話下手でお聞き苦しく御座いませうが、暫時御静聽を願ひます。
「人格と事業」といふ題を掲げましたのでございますが、人格といふ言葉は、多くは
仕事のできない人が今日は唱へて居ります、又事業に成効する側の人は、人格の方から

見ますといふと、殘忍な劣等な、さうして惡辣な事をするやうな人が少なからぬといふ有様であるところから、事業家の中には人格なき、いふものは不必要のやうに考へて居る人があり、それと反對に、人格論を唱へる人の中には、事業家は俗物であつて、話の相手にはならぬといふやうな考を持つて居る人があります、かくして双方が別れくになつて居ります、従つて學校と工場との連絡も善く取れて居らぬやうに見えます、實業界に於て有名な濫譯男爵の如きは、早くから其の事に就いて非常に心配されて、重なる學校の校長たちに對して、「學校に於てモット役に立つ様な人間を造つて貰ひたい」といふ事を度々注文されたといふ話を聞いて居ります、人格と事業とは果して關係の有るものか、無いものか、有らば如何なる關係のものか、如何にして此の二者を調和結合すべきか、此の事に就いて私の意見を申し述べて見たいと思ふのであります。

話の順序をいたしまして、先づ第一に考へて見たいと思ふことは、「人格」といふ問題であります、之れが明瞭になつて居りませぬと、此の問題の徹底的の解決は出來ませぬ、多くの人は人格と申しますと、道徳が堅固であつて、確りした人といふ位に簡単に解釋をして居りますけれども、只それだけでは人格といふものは事業の上に重大なる影響はありません、然らば本統の人格とは何ういふものかと問題を進めて行きますとそれには少くとも五つの要素が必要であります、之れを具へて居らなかつたならば眞に立派な人格とは謂はれないのであります、其の五つの要素とは何んであるかと申しますと、

第一に必要なるものは信仰であります、世界に於て東洋の人でも西洋の人でも、此の人は大聖人である、公論が一致して居る人が四人あります、其の一人は歴史の順序から申しますと、印度に生れた釋迦といふ人、其の次には支那に生れた孔子であります、其の次は希臘に出たソクラテース、其の次は猶太に生れた基督であります、此の四人は對しては、世界の人々が聖人中の大聖人として敬慕仰の情を注いで居るのであります、是等の大聖人は、各々終生の心血を注いで神を信じ、道徳を信じ、大悟大覺して自分の生涯を犠牲に供し、斯の道を實行して萬民を救済し教導したものであります、彼等は世界中の人々が擧つて反對をしても、我道は眞なりといふ強大なる信仰を有つて居る、之れが本統に偉い人である、信仰のない人間は決して偉い人でない、併し其の信仰は此の頃流行る宗教家などの偏狭な淺薄な或は山師的な信仰とは違ひます、此の心誠なれば天に愧ぢず、此の心誠なれば古聖人に愧ぢず、釋迦孔子と對座をしても我心には決して愧づるところなしといふ風な信仰を有つた人は、人格として非常に偉い人であり、世界中が擧つて反對しても動かないといふ人間は、即ち世界を動かす人間であります、人は罪の深い者であつて、洵に値打のない者であるから、懺悔をして低い生活をすむといふやうな消極の一面だけではない、さういふ消極の一面だけを見るから、信仰は洵に誇らぬもの、やうに云ふのである、併しながら釋迦を御覽になつても、基督を御覽になつても決してさういふ消極の方面だけではありません、人格の要素なる信仰を有たうと思は

宜しく進んで大聖人が有つて居つたやうな信仰を有つべきである、法華經の中にある釋迦の言葉に「今此の三界は總て是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ我が子なり」とありますが、實に大きな人格ではありませんか、また孔子は何んと云つたかといふに「文王既に没したれども、文茲に在らずや、天の將に斯の文を喪さんとするや、後死の者、斯の文に與ることを得ず、天の未だ斯の文を喪さざるや、匡人其れ子を如何せん」と、又曰く「天、徳を予に生せり、桓魋其れ子を如何にせん」と、基督は「吾は道なり眞理なり、生命なり」「我と父とは一なり」「天地は、失せん、されど我言は決して失せず」と曰はれました、斯の如き信仰を有つやうになれば、其の人の精神によつて人を統一して行くことは、なんでもありません、普通の人間のやうに、何うしやう斯うしやうなど、思はなくとも、統一は出来るのみならず、死んでも世界を動かす力を持つて居るのであります、さういふやうに考へて見ますと、立派な人格といふことには、何うしても堅固にして雄大なる信仰を有たなくてはならぬといふことが解るのであります。

第二に必要なる要素は何んであるかといふと、其れは愛といふものであります、一切の人を自分の子の如く愛し、兄弟の如く愛するといふ大なる愛であります、而して其の愛は何んであるかといふに、パウロといふ人の言葉に「愛は衆徳の帯なり」とあります、吾々が斯様に着て居る衣服は何んによつて締つて居るか云へば、申すまでもなく一筋の帯によつて締められて居る如く、總ての徳は此の愛によつて纏められ締められ

て行くものであります、パウロは、更に此の愛を説明して、「愛は妬まず、誇らず、驕傲らず、非禮を行はず、己の利を求めず、輕々しく怒らず、人の惡を念はず、不義を喜ばず、眞理を喜び、凡そ事包容、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事忍ぶなり」と申して居ります、斯の如き心を愛といふのであります。

第三に必要なる資格は何んであるかといふに、これは徳であります、ペテロといふ人は「信仰に徳を加へよ」と教へて居ります、而して此の徳は一朝一夕に得らるゝものではなく、其の人に接すると、何んとなく引き附けらるゝやうな美しい徳は、人知れず隠れたる處に於て善き心を養ひ、善き事を行ひ、自然に我知らず積まれてゆくものであります、名譽などは決して求めない、従つて今日流行るやうな宣傳はせない、此の頃のやうな宣傳をするに、差引勘定をされて徳は無くなる、宣傳に依つて一時に外へハット現はれ、其の評判が實質以上十倍にも二十倍にも何十倍にもなるが、それは永久に続くものではありません、いつか地に墜ちて了ふやうになるのであります、本當の人格者といふものは、隠れたる處に於て善い事をするのであるから、小さい事でも決しておろそかに致しません、古人の言葉に「細行を積んで大徳を成す」とありますが、今日の時代は之れと全く反對であつて、何んでも誇張的に宣傳をするといふ風になつて居りますけれども、本統の人格者は今も昔も決してさういふ事を好まぬものであります。

第四には活智といふものがなければなりません、之れは勝海舟先生が語されたこと

であります。同人社の中村正直といふ徳の高い學者がりましたが、當時慶應義塾の福澤先生と相對峙した有名な人で有りましたが、或る時、勝先生が此の中村先生に向つて「お前達は本を澤山に讀んで居るから、博學多識といふ點に於ては自分はお前達に及ばぬけれども、併しながら機に臨み變に應じ、活智縱横能く難局を切り開くことに於ては到底お前達は俺に及ばぬ」と曰はれたのであります。私の曰ふ活智といふ、此の勝先生の有つて居られたやうな智慧を云ふのであります。然らば其の活智は何うして出て来るものかと申しますと、艱難辛苦の間を辿つて、十分に自分の心を練り鍛へ磨き上げた後に出て来る者であります。海舟先生の傳記を御覽になつた方は御承知でありませうが、先生は非常な艱難辛苦をした人であります。あの時分には御承知の通り西郷あり、大久保あり、木戸あり、或は後藤象次郎、板垣退助あり、大隈重信ありといふ風で、随分偉い人が澤山にありました。それでも勝先生に對しては皆一步譲つて居つたさうでありません。多くの人は艱難に臨むとそれに負けて倒れて仕舞つたり、或はわちくれた人間になつて了ふ、ところが人格の偉い者は其の艱難辛苦の間に於て心膽を練り智慧を磨いて行くのであります。それで私は宗教上の問題に就いて聴きに來る人に對して、私の宗教は諸君を安樂にすることを目的としない。即ち安心立命は我が宗教の本義でない。我が宗教は人格の聖化といふことが目的である。人格聖化しつゝ、あらば安心立命は求めずして自らに得らるゝものであると話して居ります。其の聖化を欲するならば、艱難を厭は

ずして、却つて之れを感謝して難局の中に入り、さうして立派に之れを切り開いて行く其の切り開き方は歴史上に現はれた聖人と同じやうにして行く、其の間に活智といふものが出て來るのであります。此の智慧は佛教の方で申しますと、即ち大圓鏡智である。眞の活智が現はれて來ると、恰も鏡に物が映る如く、天地万物の真相が明かに分る、神も映るが人の心の状態も皆な映つて來る、所謂人世の裏も表も皆映るのであります。さういふ智慧を有つた人が本統に偉い人格者であります。

第五に人格の要素としての大切なもの方は力であります。之れは諸君が歴史を御覽になればお分りになります。一人偉い人が出て來ると時代が變つて了ふ、一人の力に依つて時代を變へる、一國を變へる、一縣下を變へる、一會社を變へる、こゝにいふ力を要します。

以上、五つの要素を具備した者が、申し分なき人格であります。かやうに考へて行きますと、人格と事業との關係はどんなものかといふことは、既に思ひ半ばに過ぎるものと思ひます。併しながら是れ切りではまだ盡さないものでありますから、今度は更に進んで事業といふ問題に移つて話して見たいと思ひます。

「事業」といふことは能く人が申しますけれども本統に立派な事業とは何ういふものであるといふことを考へて居る人は、世の中に幾人ありませうか、普通は考へませぬ、それは解り切つたことで、事業をやるのは金を儲けることであると思ふのでありませぬ。

併しそれ位な答では世界へ持出しては愧づかしいのであります、あなたはどんな考で事業をして居るか、事業とは何ういふものかと質問されても、成程日本にはさういふ事を考へて居る人があるかと云つて、世界の學者や事業家が感服をするやうな答が出来なければ面白くないと思ひます、それ位に意義ある事業をしてこそ、初めて人間と生れた吾々の遣り甲斐ある仕事といふことが出来ます、さういふことを考へずにたゞ事業をして金を儲ける、其の儲けた金は何うするか、それは立派な家を建てるとか、別荘をこしらへるとか、妾宅を設けるとか、酒を飲んで楽しむとか、或は一生涯を氣樂に送りたいたいふやうな考であつては、事業といふものゝ意義が至つて淺薄劣等であると謂はなければならぬと思ひます、眞の事業といふものは如何なるものかといふことについて、私の附けました定義がありますから、それを一寸御参考に申上げて見たいと思ひます、本統の事業といふものは「自他の人格を向上し、相互の幸福を増進し、世界の文化を益し、現世に天國を來たす」私はこゝにいふ定義を附けまして、郡是製絲株式會社に於て此の精神を以て事業をやるやうにと指導を致して居るのであります、さういふ考を有つて居りますと、帳場に坐つて居つて算盤を一つ弾きましても、世界に影響する程の大事を爲して居るといふ事になります、また畑に出て鋤を執つて耕しましても、それが世界の文明に影響して行くのであります、本統の事業は實際さういふ風な考ですべきものであります、それを小さいな私欲を中として仕事をして行きますから其の仕事は小規模であつて

直ちに小成に安んじて僅か數万の金でも溜るといふと、直に旦那さんのやうな氣分になつてそれから後には仕事も何にもしないで遊んで暮すといふやうな風になります。

それから事業をして本統の成功をするには、それだけの要素が具つたならばよいかといふに、それは

第一に職分を重んじて誠實に勤勞するといふことであります、若しさうでなかつたならば本統に事業の成功は出来ません、明治天皇は戊申詔書に此の意味を約めて「忠實業ニ服シ」と教へて下さいました、此の御詞が簡單でありますところから、其の聖旨を汲み得ず、之れを奉讀致しましたも之れを實行する人が少ない様であります、これは私共國民が大に考へなければならぬ所と思ひます、私は此の御詞を自他共に遵奉し實行したいと思ふところから、委しく説明して「職分を重んじて誠實に勤勞する」やうにと申して居ります、然らば何うして實行が出来るか申しますと、これが即ち人格問題に關係して行くのであります、それには前の人格の所でお話した、信仰と愛と力との三つが具はらなくては實行が出来ないのであります、之れは私が十四年間工場の内でも以て實驗した所であり、先づ自分の仕事は如何にして、如何なる時に、如何なる場合に、如何なる人より與へられたかと考へて見ますに、これは神から與へられたものであるといふことを信する、例へば役人をして居る人が、自分は知事の辭令で以て役人になつて居ると思ふ位では餘りに簡單過ぎるのであります、其の上に吾々の目には見えないけ

れども神あり天あり其の天の命令に依つて此の職分を執つて居るのであるといふ信仰、
 こういふ信仰がありますれば、日々執つて居る自分の職務は實に尊いものであるといふ
 自覺が起つて來ます、自分は食ふ爲に仕事をして居るのでない、天から與へられた職分
 に従事するのであるといふ信仰が大切であります、由來、大政治家、大事業家、大文學
 者、大教育者といふやうな偉い人は皆こういふ信仰を有つて居つたものであります、信
 仰があれば其の職分を重んずるといふ念が起り、随つて勞働といふものに就いて苦しみ
 がなくなつて來る、勞働問題といふものは物質的だけでは決して解決が出來ません、西
 洋の某學者は「勞働苦といふ思想を取除かなければ勞働問題の解決は何うしても出來な
 い」と云つて居りますが、勞働は苦しい事であると思ふやうではいけない、自分の仕事
 は天から與へられる尊い職分であるといふ觀念がなくては、決して事業に成功は出來な
 いのであります。

諸君も御承知の亞米利加のカ―ネギーは、蘇格蘭から亞米利加へ移住した人でありま
 すが、カ―ネギーの父は、當時機械の發明が有つた爲に職業を失ひ非常なる困窮に陥つ
 たのであります、さういふ家庭に育つたカ―ネギーは、職業の無いといふ事は、如何に
 も苦しい者であるといふことを子供ながらも頭に染み込む程に経験したのであります、
 亞米利加といふ國は、新しく開けた國であるから、あの國へでも行つたならば、何にか
 仕事があるであらうといふので、多年住み馴れた故國を去つて、遙々海を渡つて亞米利

加に移住したのであります、それでカ―ネギーが一番初めて奉公した先は何所であつた
 かと云ふと、絲屋であつて、其處の絲捲小僧となつたのであります、此の絲捲小僧にな
 つたといふことは、カ―ネギーに取つては實に天から與へられたる尊い職業であると感
 じましたから、彼は一生懸命になつて働いたのであります、従つて何の氣なしに奉公し
 て居る人、或は腰掛的な考で勤めて居る人とは、大いに働き振りが違つたので有ます、
 何うも彼れは少し違つた小僧であるといふので段々上の方へ擧げられる、上へ進めば進
 む程益々天職の尊い觀念を有つて働くのであるから、どの位地に在つても何時でも群を
 抜いて居る、かくして初め絲捲小僧のカ―ネギーは、遂に大成功をして、世界第一等の
 事業家となつて、一代の間に何億萬といふ富を造り、而して世界の善い事業の爲に寄附
 をした金は何億萬に上つて居るのであります、それは自分の職分を重んずるといふ念が
 成功の基礎をなして居るのであります。

次は喜び楽しんで働くといふこと、これは何處の仕事でもさうであるが、殊に大きな
 會社などに於ては中々それがむつかしいのであります、皆が喜んで働き楽しんで仕事を
 するやうになれば、事業の成績は非常に好くなるものであります、然らばそれは何うし
 てできるかといふと、これも矢張り自分の執つて居る仕事を愛するといふことが本であ
 ります、孔子の曰はれた言葉の中に「事を敬して信あり」との教があります、事とは重
 もに政事を意味して居るやうであります、之れを廣く事業と見ても差支へはありませ

ん。さうして之れを敬すると共に愛するやうにしたいと思ひます、自分の仕事を愛して爲るといふことが、即ち喜び樂しんで働くといふ事になる、彼のカーネギーはさういふ風な精神を以て仕事をしたものです、カーネギーの曰つた言葉に「勤勞は恩恵なり」自分がかういふ風に勤めて行くといふ事は天の恵みであると申したのであります、モウ一つ大切なことは蔭日向なく働いて行くといふことです、人が見て居るからとか見て居ないからと云つて、仕事の成績が變るやうでは本統に事を愛するといふことにならぬのであります、ところが日本の工業工事にはどうも監督が多いのであります、私は大抵月に一回ぐらゐ東京へ参りますが、何にかの工事のあるのを見ますと、何んにもせないので洋服を着て只見て居る者があります、それは監督で其の監督の居る間は能く仕事をしますが、それが居らなくなると仕事を怠る、それでは監督が不行届であるといふので、監督の上にまた監督が附く、そんな風に澤山な監督があつても賄賂などが行はれて疑獄事件が起ることは、諸君も御承知の通りであります、何うしてそんな風になるかといふと、つまり其の人々に信仰がないからである、人間は知らなくても神が知つて居るといふ信仰があつたならば、さういふ事は決して出来るものでありません、それは私自身の経験にもあります、昔の偉い人計りを例に引きますと、諸君は、それは偉い人であるからと云つて餘所に聞かれますから申しますが、私自身の事を云ふのは面白くないことでもあります、一例として申しますと、私は先程主催者がお話になりました通り、一年の

間に家族の者に五人までも死別したのであります、其の爲に私は深い疑問を起して、全體人間といふものは死んで何うなる、靈魂は滅するものか、滅せざるものか、來世といふものが有るか無いか、かやうに不仕合せの續くのは何の爲か、善惡の報は果してあるかないかといふ事に就いて、一年ばかりも研究したのであります、さういふ動機に由つて遂に宗教の信仰に入つたのであります、此の信仰が得られなかつたならば、或は私は死んで了つたてであります……それが解らんければ死なうと思つたからであります、併しさう云ふ風に眞剣に求めて得たのでありますから、自分が信仰をした通りに、之れを實行しやうと思つて非常に骨を折りました、爾來三十四年間繼續して來たのであります、私が二十才の頃の事でありませんが、私の郷里山梨縣に於て、當時、保安條例に由つて、星亨、尾崎行雄、其他の名士と共に、帝都三里以外に退去を命せられた土佐の名士島本仲道翁——此人は後藤象次郎、板垣退助二氏と相並んで、土佐の三傑と云はれた人でありませう——縣下自由黨の有志が此の人を主宰と頼み、甲府に於て「峽陽輿論新報」と云ふ新聞を發行することになつたのであります、私が文章を書くこと云ふので、二十才のまだ青二才の頃でありましたが、聘せられて入社することになつたのであります、其の記者時代に小宴會がありました、私は酒は飲みませんけれども交際上出なければなりませんので出かけました、自分からかう云ふ事を申上げるのは可笑しいわけでありませんが、まだ二十餘りの若い時分でありましたから、或る一人の藝者に、云はゞ想はれた

といふやうな風で、さうして一室に二人切り居ることになつたです、それはさういふ機會を外から與へたものであります、斯る場合に於て信仰が無かつたならば或は墮落するやうなことが有つたかも知れませんが、幸にして私は人は見て居なくとも神が見て居るといふ信仰が有つた爲に心の内に決して汚い感情は起らなかつたのです、誘惑的な言葉や態度が進めば進む程、良心が愈々明かになり、神の現在といふ感じが益々明かになつたのであります、當時はまだ洗禮も受けない初歩の信仰でありましたけれども、上よりの力によつて、此間に貞潔を保つことが出来たのであります、眞の信仰さへありさへすれば、今晚こゝにいふ席に居ります時も、暗い處或は人は見て居ない時でも、決して變ることはない、私の事を申し上げるばかりでない、伊太利の工場視察して歸られた大森博士に逢つた時、伊太利のアルプスの工場を見た時に、こゝ云ふ事があつたと云つて話して聞かされた事があります、伊太利の製絲工場には餘り大きなものはないが、百五十釜位なものが處々に在る、併しながら御承知の通り伊太利の絲は世界で一等と云はれて居ります、郡是でも善い絲は造りますが、日本の原料は伊太利のに劣り、生絲も、未だ之れに及びません、それで伊太利の工女はどんな風にして働いて居るかと申しますと、彼等も熱心な信仰を有つて居る、大森博士の見られた工場には、最も熱心な信仰を有つて居る二人の婦人が、百何十人と云ふ工女を全く自分の娘か妹のやうに可愛がつて能く世話をして居る、基督のお母さんのマリヤの肖像が工場に懸けてある、其處に居る工女は何

れも無邪氣な眞實な心を以て楽しんで仕事をして居る、神さまは何時も見て居られる、マリヤさまも彼處に見て居られると云ふ考でありますから、別に監督などをしなくても皆なが楽しんで仕事をし、織度が能く揃つて居る、頼節が少ない、さうして光澤のある善い絲が出来る、其處の工場主が大森博士に向つて「あなたのお國でも澤山の娘さん達が此の業に従事しておいでになるのであるが、國へお歸りになつたら、私共のやつて居ることをお話し下さつ、眞實に工女達の幸福を圖るやうにお盡し下さい」と云ひましたさうです、職分を重んじて誠實に事業を勤むると云ふことは、先程申しました信仰と愛と力と云ふものがなくては、決してできないものであります、之れは議論でなくして實驗の上さうなつて居るのであります。

第二に必要なのは一致協力してゆくといふことです、其の一致協力といふことも口で云へば何んでもないやうであります、實際に於てはなかなかむづかしいのであります、例へば大きな工場になりますと色々課が分れて居ります、吾々の方でも他の方でもそれ／＼部があつて、其部の内に課が分れて居ります、教育課もあれば、學務課もあり、衛生課もあり、庶務課もあり、工務課もあり、原料課もあり、其の他種々の課があります、それが一致協力することなく、各々自分の事だけをやつて、外の事には無關係である云ふやうでは一つの工場を完全に發展させる云ふことは困難であります、それを互に相談し互に扶助し協力一致して行くには、何うしても信仰と愛と力とが必要を

あります、これは横の方の關係でありませんが、又上と下と縦の方の關係に於て一致協力
 ができませんと近頃のやうな勞働問題所謂階級争闘と云ふものが起ります、此の縦の關
 係と横の關係とが能く一致して行きますれば則ち同心一體となるのであります、同心一
 體となつて事業を進めて行くには、何うしても信仰と愛と力とがなければならぬのであ
 ります。

折々學校長の方々が私の方を觀に参りまして「あなたの方では職員の方が能く一致し
 て居られますが、之れを統一して行くこと云ふ事は餘程困難であります」と申されます
 が、別に統一と云ふやうなことを考へませんでも、誠の信仰と愛とを銘々が有つやうに
 致しますれば、自然と縦にも横にも一致して行くものであります、神の前では人格は皆
 な悉く平等である、各々貴いところの魂を有つて居るといふ考からして、自然と人格尊
 重といふことが出来るのであります、それであるから社長と雖も職工の人格を尊重して
 行く、職工は無論社長の人格を尊重する、何程多くの人が居りましたもお互に人格を尊
 重して行きますから、幸にして只今の處争闘などは起りません、私の工場へお出でにな
 れば分りますが、私共が廊下でも通りまして職工に出遇ひますと、職工がお辭儀をし
 ます、私も心から職工を尊敬してお辭儀をします、また食堂へ往つて御覽になりますと、
 社長も専務常務の取締役も職工と同じ食卓に着いて同じ物を食べて居りますから、只今
 の處食物などに就いての不平はありません、又勞働の方から申しまして、銘々に職分

を重んじ、分業的に働いて居りました、仕事の苦勞は職工よりも却つて幹部の人々の方
 が多いのでありますから、其の間に羨望や嫉妬の情などは起りません、序でに誤解の無
 いやうに一寸申し上げて置きたい事は、私が社長以上の待遇を受けて居るなど、云ふ事
 を、大阪の新聞や雑誌に書かれたことがありますから、或は月給でも澤山に貰つて居る
 かのやうに思はれる方があるかも知れませんが、私は決してさうではありません、私はこ
 う云ふ條件で會社に入つて居ります、半分は出世間的、半分は世間的、即ち會社内勤
 務すると同時に會社外に超然たる位置に居るのであります、さうして自由に何人にも忠
 言を呈することの出来るやうにして居るのであります、さう云ふところからして社長以
 上に優遇されて居るやうに云はれて居るのであります、決して物質的に優遇を受けて
 居るのではありません、また私は當初から月給の多寡を注文した事などはありません、
 私は本社に居ります時は、いそがしくて年中休みなしに働いて居ります、餘り過勞であ
 りますから私の位置に對して氣の毒と思ふ者はあつても、羨ましいと思ふ者はないやう
 であります、何人も他を羨むといふやうなることなく、自分の職分に専心盡力すること
 は、實に信仰と愛との賜である、深く感謝する所であります。

第三に必要なものは忍耐永續と云ふことであります、これも矢張り前の職分を重ん
 ずるといふ精神に關聯して居る、それとモウ一つは人格を向上せしむると云ふ事に關係
 して居ります、此の二つがありませんと決して永續するものでありません、之れも實際

の例であります。或る會社の社長で金を儲ける爲に事業をやつて居つた人が、早く多く儲けたいと思つて相場を始めたです、之れも當れば儲かるのでありますが、當つて儲かることよりは外れて損をするところが多いものであります、かくて其の結果は大なる損失をして會社がつぶれるやうになつて仕舞ひました、モウ一つの例は歐羅巴の戦争中一時非常な利益を得た事業家がありました、此の人は此の邊で手を引かないと又損をするかも知れぬといつて事業を止め、壯年にもかゝはらず引退して仕舞ひました、私利を中心によつて居るとさういふやうに永續し難いものであります、それで事業を永續させるには、前に私がお話したやうに人格を修養し、職分を重んじ、業務を愛するといふ高尚な考がなければならず、それには信仰と愛と力とがなければならぬのであります。

第四に事業の上に必要なものは道德信用であります、之れも皆さんに能く解り切つたことであります、順序として一應申上げます、此の信用といふことには、人がらの上の信用と、働きの上の信用と二通りあります、事業をするには何うしても此二つが揃はぬといけないのであります、たとへ事業の成績が良好であつても、之れを經營する人が我利で惡辣で信用されないやうではダメであります、之れと同じく經營者の人がから正直で親切で善良であつても、事業の成績が不良で損ばかりして居るやうでは到底信用を得ることが出来ません、人間が立派で經營が立派で、其の上事業の成績が立派で、この方面からも信用される者とならねばなりません、さうするには徳と智と力とを要しま

す、道德信用といふことについて一つの面白い話がありますから御參考迄に申上げて置きます。

近年の事ではありますが、私の知人が亞米利加から歸つて來ての話に、英吉利の某紳士が亞米利加の或る時計屋に入つて、此の時計が傷んで居るから直して貰ひたいと懐中時計を出した、時計屋は中を見まして、「これは大層傷んで居りますから一弗二十五仙の直し賃を拂つて貰ひたい」といふ、紳士は「それで宜しいからお頼みするが、併し私は明日午後三時出發の汽船で倫敦へ歸るのであるから、それ迄に必ず直して貰ひたい」と云ふと、時計屋は一寸首を捻つて考へたが、暫くして「宜しうございます、何んとかしとお間に合せませう」と云つて引受けたのである、それで英吉利の紳士は、自分の乗る船の名と、宿つて居る旅館の名とを知らせて歸つたのであります、翌日の午後三時近くになつたが時計を持つて來ない、止むを得ず港へ出かけて待つて居つたが、港へも持つて來ない、其のうちにモウ船が出るよ云ふ合圖がありましたから、急いで船へ乗り込んだのであります、到頭時計を持つて來ない、懸て船は沖台へ向けて出て行きます、倫敦の紳士は非常に不快を感じて、あれ程に約束をして置いたのに勵行して呉れない、あの時計屋は不信用極まる奴であると思ひましたが仕方がない、船は遙に沖へ出ました、次第に遠ざかりゆく亞米利加の陸地の方を眺めますと、一隻の飛行機が飛んで來ます、飛行機が來るといふので甲板の上に居つた人は皆之れを見て居る、さうすると其の

飛行機はだん／＼汽船に近付いて来る、船の上に来ると低く降りて参り甲板の上へバタ
 ット何にか落した、之れを拾つて見ると小包のやうな物に氏名が書いてある、此の氏名
 は何人であつたかといふと、即ち倫敦の紳士であつた、早速受け取り之れを解いて見る
 と、中に時計と一通の手紙とが入つて居つたのであります、其の手紙に「必ず御出發の
 時間に間に合ふやうにいたしたいと思つて、一生懸命に直しましたが、思ひの外傷みが
 甚しかつた爲に、時間がかゝつたので、大急ぎでお届けしやうと自働車を馳せて港へ出
 ましたが、最早船が出た後であつて仕方がない、何うして之れをお届けしやうかと思つ
 たけれども、好い考へが出ず、到頭飛行機でお届けするより仕方がないと思ひ付き、俄
 に飛行機を儲ふてお届け申し上げます、どうか御受取り下さい」と書てあつたです、今
 ままで不快を感じて居つた倫敦の紳士は非常に感心して了つたのであります、此の事が亞
 米利加の新聞は固より、倫敦の新聞にも書かれ、非常に有名な話になりました、此の時
 計屋が一弗二十五仙の直し賃を取つて、飛行機に拂つた金は幾等であつたかといふと、
 四百弗でありました、こゝにいふ事はただ金儲けの考では決して出来るものではありませ
 ん、當時の日本の金に直して漸く二圓五十錢の直し賃を取つて、八百圓の持出しをして
 品物を届けたといふやうな、道徳あり信用ある事業家を有する亞米利加と競争をし、又
 獨逸や英吉利と競争をせねばならぬ地位に立つて居る日本であるといふ事を、諸君はお
 考へになつていただきたいのであります、併しそれによつて時計屋は損になつたかとい

ふと、結局は大に益を得たこの話である、乃ち到る處の新聞に感心な時計屋であるとい
 ふ事を書かれた爲に、何拾萬圓の廣告料を拂つても出来ない廣告になり、時計を買ふ人
 或は直す人は、皆争つて此の時計屋にゆくやうになり、それが爲に求めずして大なる利
 益を得ることになつたのであります、事業を本統にやらうと思へば、さういふ風に道徳
 を重んじ信用を重んじなければ駄目であります、これには徳と智と力を要します。

第五に必要なるものは研究改善といふことであります、事業をしても研究改善といふ
 ことをしませんといふと、幾年経つても發展は出来ないのであります、歐洲戦争以前
 に、英吉利の貿易と、獨逸の貿易と競争したのであります、その競争の結果獨逸の商
 品が英吉利の商品を漸次市場から驅逐するやうになつたのは、何ういふ理由かと調べて
 見るに、獨逸人の研究の周到緻密なることが、其の重なる原因をなして居るさうであ
 ります、私の友人で戦争以前に濠洲、亞弗利加、南亞米利加等を巡回して歸つた人の話
 に、南米の或る地方へ英吉利から針を輸出して居る、針と云へば小さいものですが、日
 用品であるから、積つて見ると金高は随分大きいことになりました、英吉利から輸出され
 る針が獨逸から来る針に追々驅逐される其の原因を調査して見たところ、英吉利の品物
 は使つて見ると長く持つけれども値段が少し高いのである、獨逸から来る針は品質に於
 て少しく劣るけれども比較的廉價である、獨逸人の研究と勤勉とは生産費を少なくして
 居る、其の上針を包むところの紙の色までも、土地の人は何う云ふ色を好むかと云ふ

ことを研究して、赤い色を好むと云ふことを知り、包紙には赤いものを用ゐて居る、英吉利人はそこまで研究して居ない、土地の人は先づ自分たちの好きな赤い色に包まれた品を取つて見る、値段を聞くと英吉利から来た物よりは安いから直にそれを買つて行くのであります、獨逸人はさう云ふ點迄も研究して居ります、只熱心に良い物さへ造ればよいと云ふだけでは世界的競争をするに足りません、亞米利加の「テーラー」と云ふ人は科學的に工場を管理することを發明したのですが、之れは時間がないから、其の發明の徑路、其の方法などについてお話することは出来ませんが、只其の結果だけを申します此の管理法を應用した工場では、以前に千五百人でやつて居つた仕事が、八百人位でやれるやうになつたのであります、幾等一生懸命になつてもさういふ研究法を應用する者との競争は出来ないのであります、斯の如く今日の世界の事業界は非常に進歩しつゝあるのであります、然らば其の研究改善は何うして出来るかといふと、之れも前に申しましたところの活智によるものであります、活智を以て活用しなければ死んで用を爲さないのであります、更に又此の活智を以て人を知り、適材を適處に用ゐる、此の活智を以て時を知り機を知り事物の表裏を知り、經營の上にも仕事の上下にも研究改善を圖らなければならぬと思ひます。

第六としてモウ一つ申上げたいのは、之れは誰でも曰ふところの能率の増進であります、能率を増進して行く上に於ては、今申上げた研究を實際に應用する事と、モウ一

つは仕事に全精力を集中して行く事であり、仕事をやる間に外の事を考へて居りますと、心が二つにも三つにも分れるやうになります、之れを統一して眞面目に仕事をするのであります、太陽の光線でも散漫して居る時分にはさうでもないが、鏡面を用ゐて之れを集中すれば物を焼く程の力が生じて参ります、それと同じ様に人間の全精力を集中しますれば必ず能率は増進するに決つて居ります、吾々は平素から散漫して居る精神を統一する修養をして置きますれば、事業をするに方つて、全精力を集中して能率が増進することが出来ます、此の邊の道理を曹洞宗に於て中興の祖と云はれて居る天桂禪師は「佛法に實なるものは世間にも實なり、世間に實なるものは佛法にも實なり」と曰つて居られる、人間の心理状態は其の根本が決つて居れば、する仕事の上に必ずそれが顯はれて来る筈であります、山鹿素行の所謂「純一無雜」の精神を以て仕事をしなければならぬのであります、之れに加ふるに無益の手数を省くと云ふことが出来れば、必ず能率は上つてゆくものであります、此の能率問題に就て短い例を一つ引いて此の講話を終りたいと思ひます、獨逸の職工と日本の職工とを較べて何れだけ能率の差があるかと云ふと、之れは戦争前に獨逸の財務官が日本の工場を視察に来たのであります、其の人が獨逸へ歸つてからの報告を見ますと「日本の工業は恐るゝに足らぬ、獨逸の職工一人の能率は日本の職工二人に匹敵する、其の熟練なる者に至りては一人にして能く三人に當るに足る」と云ふ事を申して居りますが、日本は今後さう云ふ國と競争をして行かね

ばならぬのであります、名古屋の日本陶器合名會社に於て獨逸の俘虜を六十人計り使つた實驗について面白い話がありますが、今晚はモウ時間か無くて其の事は申し上げるこゝとが出来ません、今此の講話の結論を申し上げますと、「人格は事業の根本にして、事業は人格の表現なり」人格とは今迄申上げた通りの者であります、かやうな人格を以て仕事をして行きますれば、精神的にも物質的にも二つながら成功して行く者であります、諸君はどうか此の道理と事實とを能く御了解になり、且之を御實行になつて、地方に其の範をお示しになることを希望する次第であります。

(終)

心の貧乏者は福なり、天國は即ち其人の有なればなり

(馬太傳五〇三)

人若し新に生れずば、神の國を見ること能はず

(約翰傳三〇三)

四、婦人美

大正十一年四月十六日松江高等女
學校に於て女學生婦人會員の爲に

川合先生

今日は婦人美といふことに就いてお話し致したいと思ひます。

現今世上に婦人問題を論ずる者が多く御座いますが、眞に女性の天稟を辨へ、又神の女性を此の世に造り給ふた精神を徹底的に理解して評論するものゝ少ないのは、誠に遺憾の至りであります、此の女性本來の性情を知らずして、女子の教育をなし、或は婦人の評論をなし、或は女子の纖弱なる心を煽つて、所謂「新らしき女」をつくり、或は反對に因習固陋の教育を施して、時代に合はぬ婦人をつくり、甚だしきに至りては、女子の好奇心を利用して、今一步踏み入る時は、發賣禁止になる様な如何はしき記事を載せて雑誌を賣りつけ、其の道念を破壊して願みず、或は美顔術、化粧法等を推奨して、女優や藝妓の風を良家の娘の間に流行させて、得意になつて居る者もあります、要するに婦人本來の奥深き要求を満足さすべき教育を施し、又は評論をなす者の少ないのは、非常に遺憾な事でありまして、此の点は諸君が女子として自ら深く考へ且つ大に研究すべきことでもあります、名は忘れましたが、西洋の或る哲人の語に「婦人は善ならんよりも

美ならんことを欲す」と言ふ言葉があります、又モンテニユーは「女が己の美を増さんが爲めに堪へ能はざる困難はなし」と申しました、婦人本来の性情は「美」を愛し、美を求むることに集中して居ります、然らば何を以て眞の美となすか、又如何にして眞の美を養ふべきか、順序として先づ形態美につきた話致して見たいと思ひます。

第一 形態美

これは昔から今に至るまで多くの人々によつて研究されたるものでありますが、此の形態美の中に、下品の美と上品の美とがあることを知らなければなりません、近來の婦人の形態に苦心して居る者は、下品なのか多く、白粉を厚く塗り、紅を濃くつけ、服裝を飾り立て、分を過ぎて華美に流れ、更に下つて艶美となり、嬌美となり、更に墜ちて妖美となつて居るものもあります、かくして自分ばかりは美しいと思つて居りましても眞の美を辨へて居るもの、眼から見ますれば、腹の底が見え透くやうに下品で決して美とは見ぬのであります、美の上品なるものに、天真美、純潔美、優美等があります、天真美とは、粧はずして自然に美に、たとへ粧を致しましても、自然を傷はず、自然と調和して居る美であります、純潔美、優美の如きに至つては、精神の美の形態の上に顯はれたものであります、世間には内部の精神に心を用ゐず、外部の形態を粧ふことのみ憂き身をやつし、而して天真美を失ひ、純潔美を失ひ、優美を失ふ者が多く御座いま

す。

佛道の方に「紅粉を塗らずしておのづから風流」といふ語がありまして、是れは修行を積み悟道に達した人の精神状態を形容したものであります、移して以て「天真美」の形容とすることが出来ます、又レツシングの言に、

「人若し眞に美ならば粉飾せざる時に最も美なり」といふのがあります、東西相應じて同一の意味の言葉のあるのは、深く味ふべき事と思ひます、然らば天真美、優美ならんには、如何にすべきか、これには三つの大切なる事があります。

一は姿勢であります

日本婦人の姿勢は宜しからず、女學校が開けてから、以來色々矯正された處がありますけれども、未だ完全のものではありません、幕末の頃は結髪衣服などの關係上、婦人は前に屈んで姿勢甚だ悪しく、男子は之に反して、反り身になつて歩きましたところから、當時「かがみ女にそり男」といふ言葉が出来ましたほどで明治の初めになりまして、女子の姿勢は宜しくなく、所謂「猫背」の者が少なからず、老婦人に至つては、二重に屈んで、苦しうに見ゆるのもありました。

姿勢に

(イ)座せる姿勢

(五) 立てる姿勢

(六) 歩く姿勢

とありますが、何れも美しくならなければなりません。

立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花、といふ言がありますが、此の中には座、立、歩行、三方面の姿勢の美を形容してあります。姿勢を善くするには、常に上半身を真直にしなればなりません。其の標準は、道元禪師の「普勸座禪儀」に示されましたものが最も良いと思ひます。即ち

「鼻と臍と相對し、耳と肩と相對す」るやうにするのであります。さうして白隱禪師が「夜船閑話」で教へた通り「一身の元氣」を「氣海丹田」に充たしめるのであります。猶此の事については、二木謙三博士の著はした「腹式呼吸の話」と藤田靈齋さんの著はした「調和法前傳」と、私の弟の著はした「心身強健體格改造法」とを御覽になりましねならずは、御参考になることが多からうと思ひます。

二は運動であります

古代希臘の人は、美の觀念に於て、非常に發達をして居りまして、其の彫刻などの残つて居るのを見ますと、男女の形態美の標準とすべきものが多く、これは全く運動にまつて其の美を發揮したものであると聞きました。那是製絲株式會社に於て、一同がや

つて居まする「川合式強健術」は健康増進と同時に形態美を養ふ上に於て、學理的に研究されたもので、而も時間は僅かに數分間で出来るものでありますから、大に世間に奨勵普及致したいと考へて居ります。近年我國にも婦人の運動熱が盛になりました事に實に喜ぶべき現象でありますけれども、運動の眞の目的を離れて競争を主とし、婦人に男子と同様な猛烈なる競争をさせたり、高飛びをさせたりするなどは、全く運動の眞の意義を失ひ、横路に入つたものであると思ひます。これは婦人が室内のみに引込んで居た時代の反動として起つた一種の風潮であつて、決して健全なるものとは思はれませぬ。

三は食物であります

これ亦重要な問題であります。今日まで主に滋養分を副食物から攝取しやうと致して居りましたのは、誤りの甚だしきものであります。日本人の主食物は米であります。米は眞白に致しますほど滋養分を失ひまして、半搗米か玄米かゞ宜しいさうであります。こゝにいふ智識の無い者は、米の黒いのを食膳に上せるのは、客を虐待するものであると思ふのであります。田尻稻次郎博士のお宅では、御主人は玄米食であります。女中は玄米では辛棒しませぬから、白米の飯を與へるといふ滑稽が行はれて居ります。一家の主婦たる者は常に滋養ある食物を選び、健康より状態の美を増さんことに心掛けなければなりません。野菜類、海草類には、カルシウム、アルカリ等の必要成分を多量に含

み、特にワカメ、昆布に其の含有量が多いとの話であります。運動や食物の問題は、秘の専門外のことでありますから、これ位にして止めますが、兎に角人の形態美を調へるのには、此の姿勢、運動、食物の三つに注意することが必要であります。さうして健康美、均整美、調和美をつくるべきであります。

次に精神美についてお話し上げたいと思ひます。

第二 精神美

美の問題を精神修養の上に應用することは、多くの人のなさざる所でありまして、精神修養の事を考へる者は、多く善といふことを思ひ、美といふことを思ふ者の少いのは甚だ遺憾の事であります。多くの女學校の教育に於ても其の通りでありまして、心の善と云ふことを強要致しまして、心の美と云ふことを獎勵いたしませんから、偶々美を云へば自然美や、文藝美を云ふに止まり、精神美に及びませぬから、或は質素とか、勤勉とか、節約とか云ふことを力説し、強制的に木綿の目だたぬ衣服を着せたりする所から卒業後は反動的に低級な形態美を好み、自己本能の要求を充さんとし、多年の學校教育の効果を破る者が多いのであります。故に女子を教育するに當つては、正當に形態美を養ふと共に、一層深く精神美を養はしむるやうに指導しなければなりません。

然らば如何にして、精神美を養ふかと云ふに、これには五つほど大切なものがあります。

ます。

一 は信仰であります

信仰の本尊は、完全でなければなりません。然らざれば信仰は自己の心の全部を支配するものでありますから、不完全の者を信じますれば、之れが爲めに却つて心が悪しくなるものであります。然らば完全なる本尊は何であるかと申しますれば、曰く「眞善美愛の神」であります。神の見方を小さく偏つて見ますと、其結果に不満足を生ずるのであります。例へば善のみならば美を満足せんとするの要求を満たすことが出来ませぬ、其の結果形の上に美を求めんとするに至ります。神は眞にして美、善にして美、愛にして美なるものであります。天地間一切の美は、神の美の顯現であります。之れを信すること大切であります。之れを信じ、之れに信賴するに止まらず、之れと合一することが、眞の信仰の極致であります。即ち眞を慕ふ心は神の眞の如く眞になり、道理に外れることのないやうになり、美を愛する心は、神の美の如く美になり、日の如く輝き、月の如く圓かに雪の如く潔く、花の如く香ばしくなるやうにつとむべきであります。此の神の美に合一した目を以て見ますと、近頃の文藝に顯はるる人物など、醜惡見るに堪へられませぬ。

以上「眞善美愛」と別けてお話し致しましたが、固まり一つでありまして、説明上、

四つに別けたに過ぎませぬ、心理學者が一つの心を智情意の三つに分類して説明致し、すると同じ理由であります、神の眞は、學者の頭で考へるやうな冷たい眞ではなく、善にして美にして愛なる者、神の善は世間の道德家の考へるやうな窮屈な四角な善でなく、眞にして美にして愛なる善であります、神の愛は今の宗教家や文學者の考へるやうな醜劣な愛ではなく、眞にして善にして美なる愛であります、斯の如く神の美は眞にして善にして愛なる美であります。

完全なる信仰は、此の完全なる眞善美愛の神に合一することであり、基督は「天の父の完全なるが如く爾曹も完全なるべし」と教へられました、人の心の中には、不完全ながら此の眞善美愛の四つの者が備つて居るものであります、學問をして天地の眞理を知らんとする心は、其の眞であります、自ら善くなりたいたいと思つて修養し、他を善くしたいと思つて教育する心は、其の善であります、美を愛する心は美であり、愛し愛されたいと思ふ心は愛であります、此の心が神の完全なる眞善美愛とならんとする基礎であります、故に諸君は淺薄なる美に満足せず神の完全なる美に至らんことをつとむべきであります。

神の美は、太陽星辰の美となつて顯はれて居ります、山川草木の美となつて現はれて居ります、人事上より申しますれば無邪氣な幼兒の上にも、百難に屈せざる大丈夫の精神の上にも、困難苦痛の間に夫を助くる貞婦の魂の中にも、多くの誘惑の中に節操を全

らする處女の心の中にも、現はれて居ります、此等の美の本源は神にあります、此の美の奥に徹し、此の神に合一するやうにつとむべきであります。

二は慈愛であります

セークスピアの言に「美麗と親切とは居を同うす」とありますが、親切と離れ愛と離れますれば、美も其の美を失ふものであります、英國の諺に「婦人にして情愛の薄きは其の美麗を欲ざると殆んど等し」と申して居ります、精神美を得たいと思ふ者は、必ず此の慈愛の心を養はなければなりません。

三は徳行であります

今の小説家や評論家の或る者は「人が道義だの、徳行だのいふことに支配されると、窮屈になり不自由になり、自由に美に酔ひ美を楽しむことが出来ぬ、今の時代に道德なご願慮する必要を認めぬ」と申します、しかしこれは大變に間違つた考へであります、道德の支配を脱する代りに來る者は、情慾の支配であります、基督は「惡を行ふ者は惡の奴隸なり」と仰せられました、情慾の奴隸、罪惡の奴隸となつて、何處に自由がありません、此の道理を辨へず、胡椒丸呑に誤つた議論をとり、所謂「新らしい女」になり済まし、盛に男子と交際し、徳を破り行を亂して却つて得意になつて居るのみならず

他の無垢の少女をも誘引して自分等の仲間に入る、者さへあります、其の不徳亂行の結果は如何になり行くか、五六年の後の状態を觀れば、明かに別るものであります、斯の如き人は漸々に人相まで卑しく醜く變つて参りまして、信用は地に落ち、後悔しても及ばぬ時が来るのであります。

女は男の誘惑を恐れますけれども、寧ろ男よりも、女同志より來る誘惑の方が恐るべきものであります、女同志の感化によつて思想が變つて参り、其の機會に種々様々の誘惑が入り、墮落し腐敗するに至るものであります、故に年の若い女の人だけは、良友を選んで交はるべきであります。

現今の歐州各國は、戦後經濟上の大苦境に陥つたのと、戦争によつて、人口の不足を來したのと、女子の過剩を生じたのと、思想の動搖を來したのと、其の他種々の原因によつて、風俗が紊亂し、男女共に貞操の觀念を失ひ、各々勝手な振舞をなし、之れを救ふに困難なる状態に立ち到つて居ります、此の惡風潮が我國にも波及し、不見識なる婦人は忽ち之れに漂ひ、道義の線を外れて氣儘勝手の行動をすることが、「婦人の自覺」であり、「婦人の解放である」と思ふて居りますが、實に歎かはしき事と謂はなければなりません。

日本婦人の不徳が悪いと同じく、歐州婦人の不徳も悪いのであります、歐洲の婦人が不徳に流れたらば、日本の婦人は之れを善くする爲めに働くべきでありますのに、之れ

を爲さずして、自分も其の不徳に真似て墮落することは、何たる心得違ひであります。

男子の不品行が悪いと同じく、婦人の不品行も悪いのであります、婦人の節操が大切である如く、男子の節操も大切であります、私は「真正なる婦人の自覺は益々自分の品行を潔くして、男子の品行を潔くし、益々自分の貞操を堅くして、男子の貞操をも堅くするに在り」と信する者であります、而して婦人が眞に自覺し來る時は、能く男子を感化することが出來ると信するのであります、然るに之れを爲さず、男子が禽獸の如き行をなすが故に、婦人も同じく禽獸の如き行を爲さざれば損であると思ふが如きは、何たる間違つた考であります。

徳行が如何に婦人の精神美に關係するかについて、名高い人々の金言を擧げて、御參考に供して見たいと思ひます。

ヤングは「美麗にして貞操ある婦人は、神の完全なる妙作なり、天使の真正なる榮譽なり、地上の珍奇なる靈性なり、世界の唯一なる佳品なり」と申しました。

セークスピアは「婦人をして傲慢ならしむるものは其の美麗なり、之れをして頌讚を被らしむるものは其の徳行なり、之れをして神聖の如く見せしむるものは其禮讓なり」と申しました。

ペーコンは「徳行と眞理とは、最も美麗に且最も愛らしき二人の天女なり」と申し、又「徳は香氣の如し、之れを碎けば益々香ばし」と申しました。

シルレルは「貞操は唯一の無價の財寶にして、之れを得んと欲せば、皇后も市人の妻と競争せざるを得ざるなり」と申しました。

アラビヤ物語には「地上に於ては有徳なる愛らしき婦人に比較し得べき者なし」とあります。

獨逸の諺には「徳なき美は、香氣なき薔薇の如し」といふのがあります。

和蘭の諺には「正直なくば、美は渣滓に過ぎず」といふのがあります。

ヤングは「恥を知らざる女は人間中の最も悪しき者なり」と申しました、ごうか諸君の御熟考を願ひます。

四 は 識 見 で あ り ま す

今や世界の思想界は、紛々紜々、甲の論は乙の説と異なり、丙の説は丁の論と反し、孰れが是か、孰れが非か、孰れが正か孰れが邪か、大抵の人は判断に迷ふて居ります、或は判断を誤まつて居ります、確乎たる識見が無ければ己を誤り、人を誤るに至るものであります、有名な博士のやうな人でも、識見の無い人は、知らず識らずの間に、外國の宣傳に左右せられ、外來思想を丸呑みにして、社會を誤まり、國家を誤るやうな議論をする者があります、徳富蘇峰氏は、こゝにいふ學者を評して、「日本人でありながら、我英國、我米國と唱ふ人」と申して居りますが、今は學者ばかりでなく、評論家、

運動家、新婦人、女學生の中にも、「我英國、我米國、我佛國、我露國」の連中が出來て居ります、不見識も亦甚しと謂はなければなりません。

セークスピアが「婦人をして傲慢ならしむるものは、其の美麗なり」と申しました如く、形の美にのみ執着して、傲慢となり、虚榮となり、僅に新聞や雑誌などで淺學輕浮の知識を拾ひ、謙遜して教を聴き道を學ぶことをしませぬと、遂には無識無智となるものであります故に獨逸の諺には「美と智とは相伴ふ事稀なり」といふ語があります、舊約聖書の箴言に「美しき女の思慮なきは、金の環の豚の鼻にあるが如し」とあります、舊識見無く思慮なき結果は、種々の問題を惹き起し、折角の美を損して醜くすること甚だしいものであります。

又女の人が集まると、能く話をする者であります、其の話の材料は、多くは人の噂さ世間の雑話、甚だしきは、他人の悪口さへ語る者が多いので有りますが、是れ全く識見の無い爲めであり、而して其の識見の無いのは、平素の心懸けが足らず、ただ好奇心や、虚榮心や、嫉妬心に驅られ、見るもの聞くもの、中から、珍らしい事、悪い事、卑しい事を取り、之れを話題として無用な、或は有害な話をするのであります、諸君は注意して此の弊に陥らず、自己の識見によりて、善惡を判別し、善を取り入れ、善を出すやうに心掛けなければなりません、佛道の方の語に「牛の呑む水は乳となり、蛇の飲む水は毒となる」とあります如く、同じ本を讀み、同じ話を聞いても、心得方によつて

それが乳どもなり、毒どもなることを知らなければなりません。孔子が「三人行けば必ず我が師あり、其の善きものを選んで之に従ひ、其の善からざる者は之を改む」と教へられた通り、自己の識見によつて、能く善悪是非を判別し、不善を改め、善に従ひ、非を去り、是を取り、精神の美を養ひ、更に人の精神をも善くし、美しくするやうに心懸くべきことであります。

五は趣味であります

人の趣味は高尚にすべきであります、精神の美醜は趣味の高下に比例して居るものであります、所謂新らしき女たちの趣味の低いものになりますと、夜、男と連れ立ちて、カフェー店に入り、五色の酒を飲んで文藝美術の怪しげな評話などをして、覺醒した新人ので趣味あると思ひ、相伴ふて墮落の淵に沈みゆく者もあります、惜むべく悲むべき事ではありませぬか、諸君は識者が見て高尚なりとするものを好み、又之れを樂しむやうにならなければなりません、放縱なる生活を好む者などは、高尚なる趣味より見れば、墮落であります、腐敗であります、斯の如き人々が、基督の十二使徒の内に交つて趣味を同うすることが出来ますか、孔子の十哲、釋迦の十六弟子の中に入つて樂を同じうすることが出来ますか、ダンテと話して趣味を同じうすることが出来ますか、トルストイと語つて樂を同じうすることが出来ますか、私共は斯の如き立派な人々と趣味を

同じうすることの出来る人とならなければなりません、然らば如何にして高尚なる趣味を養ふかといふに、

- (イ) 神を愛し、
- (ロ) 聖賢を愛し、
- (ハ) 衆人を愛し、
- (ニ) 自然を愛し、
- (ホ) 修養を愛し、
- (ヘ) 高尚なる文學を愛し、
- (ト) 勤勞を愛す、

ることを要します、時間をとることを恐れまして、説明は之れを略します。

以上の如くして、精神美を養ふことが出来ます。次ぎには、精神美と形體美との關係を申述べて見たいと思ひます。

第三 精神美と形體美との關係

人間の精神と身體とは、互に密接の關係がありまして、學者が「心身相關の理法」と申しまする如く、肉體の變化が直ちに精神に大影響を及ぼすことは諸君の御承知の事であり、例へば胃腸や腦が悪くなりますと、氣分が甚だ悪くなる如く、精神の善悪

は、また身體に大關係を及ぼすものであります。

精神が形體に關係を及ぼすことについて、東西の賢人名士の言を紹介致しますれば、シセロは「顔は精神の門なり肖像なり」といひ、フォードは「眼は感情の窓なり」といひ、孟子は「人に存する者、眸子より良きは莫し、眸子は其の惡を掩ふこと能はず、胸中正しければ則ち眸子瞭なり、胸中正しからざれば、則ち眸子眊し、其の言を聽いて其の眸子を觀るときは、人焉んぞ瘦さんや」と申しました、人の精神の善惡は、目にも口にも、顔にも態度にも、必ず現はるゝ者であります。

傳記に残つて居る基督の容貌は「少し波をうつて居る髪は葡萄の美酒の色で、頸まで長く垂れ、ナザレ人の風によつて頭の半ばで、之れを分け、眉は秀で色は白く、胡桃色の鬚は長きに過ぎず、鼻と口とは美妙の趣を盡し、語る時には、温籍の氣、聴くもの心酔はせ、戒むる時には萬軍を叱咤するの勢あり、而も眼の美しさは、此の世のものでない」といはれて居ります。

これは傳説でありますから、事實の如何を知りませぬが、以下事實を擧げて更に説いて見たいと思ひます。

一は美が變じて醜なることであります

たとへ容貌の美しい人でも、其の思想や、感情は惡化し、品行が墮落して參りますると、其の貌も美變じて醜となるものであります、殊に品行の悪い人は、いやらしい威を起さしむるものであります、又盜賊などを致します者は其の目に一種の鋭い光を生じ警視廳などに居る刑事の如きは、多年の經驗から斯の如き人を見ると、一目して忽ち前科何犯と言ふ處まで知れると申すことでもあります、藝者の如き、如何に立派な形を致して居りましても、人に尊敬の心を起さしむるものではありません。

米國の或る畫家が、理想的の美人を繪かうとして、其の専門の審美眼から、十幾歳の美しい娘を見出し、之れをモデルとして名畫をつくり、非常の名聲を發揮致しました、今度は又之と反對に、第一等の醜婦を畫かうと思ひ、多年其のモデルを搜して、漸く最醜の婦人を見出して、之れを書きました、後に此の婦人と談話を交換して、驚くべき事實を發見致しました、それは、此の最醜の婦人は、嘗て最美の少女として繪いた人と同じであつた事であり、これは全く此の婦人の美貌が禍を致して墮落をいたしましたものであります、その墮落の結果、最美の女が最醜の女に變つたのであります、ゾービーは「敵が婦人を醜くからしむるは、惡性の如く甚しきに至らず」と申して居ります。

二は醜が減じて美を生ずることあります

私が北海道の函館に居つた時、知り合ひになつた、或る教育者が、話の中によく「家内が」と申しますから、私は夫に斯く重んぜられて居る夫人は如何なる人かと思つ

て居りました然るに一月、其の婦人が用事あつて、私の家にたづねて来られました、其容貌は醜と申すほどではありませんが、とても美とはいふ事の出来ぬ者でありました、然るに其の夫人が挨拶をし、話を始めますと、其の容貌に一種の氣高い美しさを生じて参り、私は成程、賢夫人であると感じました、惜しい事には病氣で長逝されました。

今一人は私の生國山梨縣の甲府に往んで居られる婦人でありすが、長は高からず、容貌も美しからぬ人でありますが、三十年以上の辛苦の間に、固き信仰を養ひ、普通の人には堪へられぬほどの逆境に堪へ、女でありながら、甲州實業家十傑の一人といはれ、事業上からも、信仰の上からも、多數を感化して居ります、嘗て櫻井勉氏が山梨縣の知事として赴任されたとき、氏は東京の或る友人に、「誰か甲府に於て縣治上の相談相手になる人を紹介してくれ」と頼みました時、其の人は此の婦人を紹介致しました、それから櫻井氏が職中は、毎週一回知事と會見して政事上の意見を交致換しました、こゝにいふ人でもありますから、話をして居る間は、其の善美の精神が容貌にも態度にも現はれ人をして其の美醜を忘れて自ら敬意を表さしめます。

外貌の醜は之れを變へることが出来ませぬけれども、人をして其の醜を忘れて其の美を感せしめますのは、全く其の精神美の然らしむる所でもあります、然らば生來美しい人が其の修養によつて一段の美を發揮することを得るは、當然の事であります、英國の誌に「有徳の婦人は、假令其の容貌は醜きも、家の裝飾なり」と申す言があります、前に

申上げた二夫人の如きは、實に其の人であります。

三 は精神美が形態美を永續せしむるこゝであります

形態美は永續し難きものでありますが、之れを永續せしめんと欲するのが、世界古今の人情であります、人情であり希望でありますが、事實は之れを許しませぬ、こゝに詩人の歎きがあり、こゝに歌人の恨がおります。

劉廷芝は

宛轉たる蛾眉能く幾時ぞ、

須叟にして鶴髮亂れて糸の如し。

と吟じ、小野小町は、

面影のかはらで年の積れかし

たどへ命に限りありとも。

と歌ひました、小町の歌は無理な注文でありますけれども、死ぬまで其の美しさを保ちたいと願ふ婦人の優しい情が能く現はれて居ります。

しかし劉廷芝の詩にあるやうに「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」で老は年々襲い來り、美は月々衰へてまゐります、之れを奈何すべきか。

こゝに於てオダビスは「婦女子よ衰へ易き容色を補はん爲めに精神を磨け、汝の臨終

まで永く存するものは、只精神のみ」と申して、此の問題に一點の光明を與へました。精神の修養につとめぬ婦人は、其の形態美を保つ爲に、ただ化粧をするより外の道を知りませぬ、殊に自分よりも年少の男子と結婚した婦人の如きは、年齢にも恥ぢず、醜いほど厚化粧をなし、形の上から若々しくして、人に好一對の夫婦と見られるやうに努めて居りますが、それは却つて下品に見えますのみならず、實に人をして一種の悲惨の思ひをなさしむるものであります。若し此の形態美を保たうとする苦心を一轉して、精神美を養ふことに務めます事ならば、其の人は何時までも生き／＼した美しさを繼續して行くことが出来るのであります。

人が其の形態美にのみ苦心して居ります間に、其の衰退は刻々迫りつゝあるものでありますから、各自早く覺醒して精神の修養に志し、心の美を以て形態の美を保持し、人にも亦かくの如く覺醒を促すやう心懸けなければなりません。

西洋の或る學者が、人の若さとその美は修養によつて繼續し得るものであることを實驗によつて證明したことがあります。南米に居るインデア人と、教育ある亞米利加の婦人とを比較し調和しまして、教育修養のない野蠻人は、早くふけるものであることが知れました。彼等は十五六才から一躍して三十四五才の年齢にふけますが、それは結婚生活を土臺としてかく變化するものであります。嘗てアメリカン、インデアンの婦人に十八才であつた者が嫁して人妻となり、忽ちにして其の三十四五才になる母と相並ん

で、同様に見ゆるほどにふけました。南米のベネジエラ、此の地は熱帯地方でありまして、人も早熟でありますから、結婚も非常に早いのであります。十三才にて母となり、子持ちとなれば、三十、四十の母と同様にふけるといふことがあります。北米合衆國の教育あり修養ある婦人には、三十才位で尙ほ若く美しい娘があります。尙ほ他の學者の廣い研究によりますれば、英國の女は其の美しさの段々發揮します時は三十才から四十才まででありまして、美の絶頂は三十五六才であると申します。日本婦人の美は十七才から三十五六才迄で、その美の頂點は二十四五才であると申します。日英を比較して斯く相違のありますのは、全く婦人の精神の修養と、身體の健康との如何によるものであります。精神の修養によりまして、能く形態の美を繼續し得ることは、理論よりも事實の上に確證されて居ります。

四 は精神美は何人も之れを養ふことが出来る

こいふことであります

生來醜い人でありまして、精神美によつて人から美しく見られますことは、前に申上げました通りであります。頼山陽の門人に森田拙齋と言ふ人がありました。此の人は年少の時天然痘を病みまして、顔が甚だ見苦しくなり、其の爲めに婦人から嫌はれ遂に發憤して勉強し、當時の碩儒として多くの人から重せられる人となりました。精神美は

決心すれば誰にでも修養が出来るものであります。

五は精神美は永久であるといふことでもあります

前に申上げました通り、オビダスは「臨終まで永続するものは精神の美である」といひましたが、精神美はただ臨終迄のみならず、死後までも永遠に続く者であります。美にも色々な種類がありまして、例へば自然美にして、富士山の如く獨立して何處から見ても同じ形で美しいものもあり、日本アルプスの如く山脈をなし、千態万状して美しいものもあり、奈良の三笠山の如く優しく美しいものもあります、吉野の櫻の美もあり、月ヶ瀬の梅の美もあり、華嚴の滝の美もあり、龍田の紅葉の美もあり、坂東太郎の洋々たる大河の美もあり、富士川の如き激流逆巻く美もあります、斯の如く常に精神を修養して止まざる婦人は、少女の時には少女の美があり、妻となつては妻の美があり、母となつては母の美があり、老婦となつては老婦の美があります、信仰あり修養ある魂は、決して老ゆるものではありません、月を重ね、年を積み、精神の修養が進めば進むほど新らしい美を發揮し、信仰の美、慈愛の美、徳行の美、識見の美が其の容貌をして、いつも美ならしむるものであります。

斯の如き人は老ゆるに至つても、其の美が衰へぬばかりでなく、死後までも其の美は永続するものであります。孟子の母、オーガスチンの母、楠水正成の妻、細川忠興の妻

其の他の賢婦、貞婦、孝女、烈女の精神は、書物に載つて、後世に残り、人々に偉大なる感化を與へ、世界を美化し、善化して居るではありませんか、加之現世に於て信仰を養ひ、精神を修め、愛と義との美しい生涯を送つた人の魂は、肉體を離れて後も、神の前に進歩して止まず、更に神の御用を務むることが出来る者であります、之れを思ひ、之れを考へて、私共は常に怠らず精神の修養をなすべきであります、戦後世界中の人心疲勞し、信仰の心衰へ、道徳の念弱り、腐敗墮落、嫉妬、争闘、何時正道に復するやを知り難き状態にあります時に當り、私共は率先して、天地の道と徳とを躬得して、世界の人々を善導する覺悟を持たなければなりません。

(終)

魂よなんぢ靈えたり、復罪を恐すこと勿れ、恐らくは前に歸る美な
んぢにかゝらん
(約書傳五〇十四)

向上の一路 (終)

289
77/

此書非賣品に
候得共御希望
の向へは一部
金拾五錢にて
御願可致候

大正十二年一月十五日印刷
大正十二年一月二十日發行

(非賣品)

編輯兼發行者 四方文吉
島根縣松江市灘町六十四番地

印刷者 藤川善之助
島根縣松江市寺町百十一番地

印刷所 愛隣社活版部

○大正十二年一月十五日印刷
金拾五錢にて御願可致候
御希望の向へは一部
金拾五錢にて御願可致候
御願可致候

大正十二年一月二十日發行

終

